

Away down the valley,

Away down the hill.

Away down the river,

A hundred miles or more,

Other little children,

Shall bring my boats ashore.

子供が膝かち下をまるだしで、足さきを水に浸し乍ら、幽邃の谷川に小さい玩具の船を浮べてゐる挿畫があります。

黒ずんだ栗色の川、黄金色の砂、小川はいつまでも流れてゐます。緑の木葉や泡の城や私のボートそれらは一體どこに歸りつくのだらう。子供の思慕心は翼をのばして聯想の幕が擴げられるのです。水車をこえ

谷を下り小山の下を過ぎ、遂に——幾百里、そして他の子供達が私のボートを海まで運んでくれるだらうと、一隻の船に托する遙かな思慕心。そして其は至つて平和なあくがれであります。

THE WIND

I saw you toss the hives on high

And blow the birds about the sky;

And all around I heard you pass,

Like ladies skirts across the grass—

O wind, a-blowing all day long,

O wind, that sings so loud a song!

I saw the different things you did,

But always you yourself you hid.
I felt you push, I heard you call,
I could not see yourself at all—
O wind, a-blowing all day long,
O wind, that sings so loud a song!

O you that are so strong and cold,
O blower, are you young or old?
Are you a beast of field and tree,
Or just a stronger child than me?
O wind, a-blowing all day long,
O wind, that sings so loud a song!

この謠をよむと風のやうに軽くうたはれてゐるのが感ぜられます。子供が春風吹く野邊に立つて柔かい髪をぼうほうとなぶらせながら風よ吹け〜一日吹けよと歌ひながら紙鳶をあげてゐる心持がうかんでくるではありませんか。

又「農場よさよなら」の謠の如き、頑はない子供が母の手にひかれ乍ら、かつて遊んだ田舎の農場の家にも畑にも、牧場にも、馬屋にも、木にも、プランコにもすべてにさよならを告げてゐるやさしい情が現はれてゐます。

FAREWELL TO THE FARM

The coach is at the door at last;
The eager children, mounting fast
And kissing hands, in chorus sing:
Good-bye, good-bye, to every-thing!

To house and garden, field and lawn,
The meadow-gates we swang upon,
To pump and stable, tree and swing,
Good-bye, good-bye, to everything !

And fare you well for evermore,
O ladder at the hayloft door,
O hayloft where the cobwebs cling,
Good-bye, good-bye, to everything !

Crack goes the whip, and off we go ;
The trees and houses smaller grow ;

Last, round the woody turn we swing ;
Good-bye, good-bye, to every thing !

この他面白く雜る二三の事し 終る ちや。

MY BED IS A BOAT

My bed is like a little boat ;
Nurse helps me in when I embark ;
She girds me in my sailor's coat
And starts me in the dark.

At night, I go on board and say
Good-night to all my friends on shore ;
I shut my eyes and sail away

And see and hear no more.

And some times things to bed I take,

As prudent sailors have to do ;

Perhaps a slice of wedding-cake,

Perhaps a toy or two.

All night across the dark we steer ;

But when the day returns at last ;

Safe in my room, beside the pier,

I find my vessel fast.

BLOCK CITY

What are you able to build with your blocks ?

Castles and palaces, temples and dooks.

Rain may keep raining, and others go roam,

But I can be happy and building at home.

Let the soft be mountains, the carpet be sea,

There I'll establish a city for me :

A kirk and a mill and a palace beside,

And a harbour as will where my vessels may ride.

Great is the palace with pillar and wall,

A sort of a tower on the top of it all,
And steps coming down in an orderly way
To where my toy vessels lie safe in-the bay.

This one is sailing and that one is moored :
Hark to the song of the sailors on board !
And see, on the steps of my palace, the kings
Coming and going with presents and things !

Now I have done with it, down let it go !
All in a moment the town is laid low.
Block upon block lying scattered and free,

What is there left of my town by the sea ?
Yet as I saw it, I see again,
The kirk and the palace, the ships and the men,
And as long as I live and where'er I may be,
I'll always remember my town by the sea.

THE LAND OF STORY-BOOKS.

At evening when the lamp is lit,
Around the fire my parents sit
They sit at home and table and sing,
And do not play at anything.

Now, with my little gun, I crowl
All in the dark along the wall,
And follow round the forest track
Away behind the sofa back

There, in the night, where none can spy,
All in my hunter's camp I lie
And play at books that I have read
Till it is time to go to bed.

There are the hills, these are the woods,
These are my starry solitudes ;

And there are river by whose brink
The roaring lions come to drink.

I see the others far away
As if in firelit camp they lay
And I, like to an Indian scout
Around their party prowled about.

So, when my nurse comes in for me,
Home I return across the sea,
And go to bed with backward looks
At my dear land of story-books.

五 兒童を解放せよ

これまで私は童謡に就いて、かなり學究的歩調を續けました。然しこれらの童謡がソク／＼と私にせまつてきます。そして、何度も繰りかへしました通り、私をして繁雜な現實の生活様式からフラ／＼と超脱させようとするさへします。この力こそ私達が今まで探し求めてゐたものではないでせうか。誠に子供は子供の世界の民族であり、子供には親も幼くなります。私は手少な、私の家の狭い室でペンをとつてゐながら、去年の晩秋に生れた娘の子の世話をしなければなりません。私が机からはなれると、側にチヨコナンと坐りながら不平をいつてゴム人形をシヤブツテゐた赤ん坊は兩手をあげて抱かれようと用意します。抱きあげて頬すりしてやりますと、ヤア／＼といつてよろこびます。暫くあ

やして又側そばに坐らせておきます。機嫌きげんの頗よるよくなつた赤ん坊は私が思はずにかされて高聲たかこゑに謠うたふ歌につれて呂律りじつもあはぬがヒイ／＼と叫びます。親がバースで赤ん坊がテーナといふところところでせう。赤ん坊が何かしら、快い調子ていしに誘いざなはれて歌うたひ出す、これこそ眞まことに子供の躍動えつどうせる生命せいめいそのまゝのあかしあかしではありませんか。まことに子供は歌ふ動物うたふどうぶつです。私は嘗かつててかういふ事ことを書かきました。

「童のひとみを見るがい、童のひとみを見入つてゐると、聖者の純まことな心が湧わいて來きるではないか、味あじつていたゞきたいと思おもひます。あの本當ほんとうに涼すずしい、清澄せいじやうな、そして無心むしんな、人なづつこい、あのひとみを見てゐて、どうして子供こどもを冷ひやかに見みかへすことが出來こませう、天真てんしんにはれ／＼しく、もうすこし率直すつちくに云いへば些ちつとも怒いららずに育そだて、行いきたいと思おもつてゐます。もしならうことことならたとへ自分おのれにもしもの事ことがあつても、暗くい死しの陰かげを

見することなくして常住の花の春に住ませたいとまで思つてゐるので

「子供心を浄化する」といふことが兒童の教育の根本義とかねて思つてゐます。御覽なさい、あのひとみを。「お話して頂戴」といはせるひとみ、お八つがたべたいといはせるひとみ、ときにはきよとくと不安らしいあのひとみ、そしていつの場合でもよく私共の顔を涼しく美しくうつしてくれるあの淨いひとみ、あゝあれ位、人間にとりて聖な神々しい、さうして人間味の溢れた光が、またとありませうか。

終日働いて歸つた窓臺の一輪の紅い花、その花がどんなに私共の心を洗ふこととせう。一日でない一生行路難の遍歴者である人間の勞を慰せんとならば、毎日間に待ちこがれて「父ちゃん、おかへりなさい。」とまはらぬ舌に人の言葉を綴る子供を抱きあげてそのひとみをまもることと

ありませう。

子供！子供！よにも可愛い、遊んでも遊んでも飽かない、さうして又遊びたくなる子供、白銀にも、珠玉にもかへられぬ子供、始終まなかひにかかつてゐる子供かうした子供なればこそ、私達と切斷することは出来ないので。

子供を眞に愛することは子供を解放することでありませう。解放することは自由であります。子供は自由をこの上なく尊びます、自由の天地に伸びくします。子供には、いふまでもなく、伸びることが生きることで、伸びて行け、伸びて行け、これ位、私達が子供にかける祈願がまたとありませうか。

私の筆は大分感激的になつたことを私自らも意識します。實際私は子供の解放の爲めには、氷の理性で理窟を通すより、熱い情で、あたゝめた

く思ひます。

私は絶えず二種類の境遇にゐる子供を見ます。一つは、モウバツサンの「女の一生」に出てくる、ジャンヌといふ母親の了解のない愛に不自由になつてゐるブウレイのやうな子供達です。一つは頑くな大人によつて子供の弱々しい身體を不死身にでも作りあげようとする鐵槌の下に可哀さうにもオロ／＼としてゐる不自由な子供達です。前者は家庭の母親に多く、後者は無理に成績をあげようとする學校に數多く發見されます。何れも誠に不自由な子供達です。始終霜枯れの野にぼつねんと立つてゐる枯蓬を見るやうな痛々しさを見せてゐます。

子供が大人への準備の犠牲に献げられてゐる間に、尊い、かけがへのない子供時代は過ぎ去ります。人間はそれ／＼その自らの時代を享樂すべく作られてゐます。子供は子供の時代を、青年は青年の時代を。大人

はたゞ時代の維持者として、讓渡者として、子供のディレクターの責務を盡してさへゐればそれで結構です。子供を解放しなさい。解放された子供は伸びます。

子供を解放するといふことは、子供だから許してやるといふ淺薄な考へからではない。又子供は弱いから、無理さしてはいけないといふ偽善的の同情からではない。子供は子供として人間である。私達と同じ人間であるといふことからあります。人間と人間との間柄であつて、両方から其の存在の辱さに涙がこぼれるほどの歡喜法悦の心からであります。

子供には型はありません。子供は常に殻を破つて進んでゐます。子供はどこへでもする／＼と行きます。子供の家には錠はかゝつてゐません。往來自在です。

大人は何故に自分の戸に錠をはめるのでせう。私は錠を見ると痛ましい。錠を去れ、蝶番から自分の戸をはづせ。そして光明遍照の外界に向つて門戸を開け。心は伸びるところに生きる。獨りは寂しい筈だ。かう叫びたくなります。所詮、子供の世界へ旅行せよと言ふことになり

ます。

ホイットマンは歌つてゐます。
見も知らぬ人よ。あなたが行きすりに、私に遇つて話しかけようと望むなら、話しかけ悪い譯が何所にありませう。

又私があなたに話しかけて悪い譯が何處にありませう。(有島譯により)

Stranger! if you, passing meet me, and desire to speak to me, why should you
not speak to me?

And why should I not speak to you?

子供にはストレンヂアはありません。氣がむけば、何所の誰にでも、叔父さん!といふなづかしい言葉で呼びかけます。何と其の自由なことよ、子供は聖です。隨所に人なづつこくなります。

子供の世界に筆を入れた以上、今すこし、その邊りを歩かせていただきます。

大阪毎日新聞の日曜倶楽部(大正八年六月三十日)に「子供の國を眺む」といふ記事があつた。その中に大阪西區江戸堀幼稚園の膳園長の話のせてありました。

「御覽なさい。指揮者は一人もゐません。それだのに、あれだけ人数が共同作業をして衝突もしなければ喧嘩もしません。あれは皆眞剣の事業です。小さな軀を、あんなに働かしてゐます。決して遊び事ぢやないのです。」

どうせ子供の遊びだなどよく平氣でいふ大人がありますが、私は其れをきく度に腹が立ちます子供は遊んでゐるのぢやないのです。この語に續いて記者は更に、彼等は暇つぶしに砂遊びをやつてゐるのではないらしい。あの人には爲なければならぬから、してゐるのである。あれはあの民族の事業なんだ。彼等の生命なんだ。その事がどんな結果に終るか、は彼等の念頭に全然ないのである。あの國の人々は單に爲さんが爲めに爲しつゝあるのだ。とつけ足してゐます。

大人に大人の世界のあるやうに、子供にも子供の世界が存在してゐます。さうしてどんな大人でも一度はこの子供の世界を旅行して來た者であるけれども、さて大人となつて了へば、子供の世界から絶縁されてしまつても、もう子供の國に入國することが出来なくなります。

總じて人間は利己的主我的のものであります。大抵の人間が自分以

外の物に對して力を及ぼす時には自分勝手の振舞をしたがるものであります。そして其が一番正しいこと、思つてゐます。然し乍ら靜かに考へて見るがよい。大人達が果してどの位其の生活に眞劍であるか？一日でもよい。緊張し切つた自分を持ちつゞけることが出来るか。自分自身ではさう思つてゐても、ぐらつきのある、ごまかしのきく生活を營んでゐる者が多い。指揮者なくして仕事をなせるその眞劍さを子供達に見るがよい。生活即自分で又眞劍であります。私達はどうしても、子供ばかりは誤魔化すことは出来ません。あの眞劍さに向つた時、淨玻璃の鏡の前に立つた時の如く不安と、戦慄とを覺ゆるのであります。ルツソオーが其の著エミールの冒頭に、

God makes all things good; man meddles with them and they become evil.

He forces one soil to yield products of another, one tree to bear another's fruit.

と書いてゐます。誠に大人の宛推量からの親切位、子供に厄介なものはありませんまい。一體大人は何と云つても純といふ點に於いては子供にはかないません。聖といふことにかけても子供の前には出られません。自由や解放、それ等は皆子供の國の言葉であらねばならぬ。大正八年四月二十七八日に長崎縣小縣郡神川小學校で開かれた第一回兒童自由畫展覽會に就いて、片上伸氏が其の評を書いて子供の爲めに氣焔をあげてゐます。其の要領は次のやうであります。

「小縣郡とモスタワとの兒童自由畫展覽會を通じて、何人にも氣のつくことは、是等の畫の作家である兒童が年少であればあるほど、その描かれたも、形は奇異であつて、それと同時に獨創的であり自由であり、大膽であり、自然であるといふことである。一體兒童ほど獨創的で氣かねのないものは無い。兒童は人間その儘である。然るに現實の生活そのも

のと、教育とが寄つてたかつて天才を平凡に平均させて行く。すべてのものゝ受け入れ方、感じ方、觀方、考へ方、及びそれ等の現はし方の上に何より大切な「直接性」をばかして行く。磨りへらして行く。人間の生きる態度として最も貴いのは「直接性」である。直接に眞實に自然に生きるといふことである。この何より貴い「直接性」の失はれて行くといふことほど傷ましく惜しむべきことがあらうか。童兒は常に創造してゐる。彼等は創造のよろこびにひたつてゐる。エマースンも「兒童は何人にも氣兼ねをせず、調子を合はして行かない。人が皆兒童に調子を合はせて行く」と言つてゐます。

廣島高師の岡部教授が、嘗つて情操陶冶論で言はれたことがあります。情操の性質は一種柔軟なるもので譬へてみれば、春野の若草の如く如何にも生氣はあるが多少の心なき手硬い取扱ひにあへば、忽ち枯れ果て

て了ふ。恐らくは如何なる反對の情操や冷靜の人でもある種の情操の萌芽を示さないものはなからう。而かも共棲者や傍立者が適當な陶冶を講じなかつた爲めに全く沒情味漢に墮落し去ることが多い様であります。

總じて情操は恰も有機物の生成發育するやうに漸次に發育するもののやうに思はれます。そして無限に發展する性質を有するやうです。そして其の力は人格全部及び其の根底を動かすやうであります。と

子供の情操の柔かで、伸ぶべき運命を持つてゐるといふことを思ふ時に、私達は子供も將來は大きくなるのだから、其の時の爲めに何もかも教へておかねば不覺をとると詰込まうと欲する人達位殘忍な者はないと思ひます。知るといふことは極めて大事な事であるが、無理に知らしめることは亦害あるものです。不可思議の子供は不可思議の力を有つ。

子供は知識の要求する分拆綜合の道をとらずに直覺することがあるやうであります。ダゴールが其の自叙傳の一節に次ぎのやうに言つてゐます。

「私は自分で能く理解することが出来なかつたが私を感動せしめた色々の事を思ひ出します。一度平屋根の上で私の兄さんが忽然として天を蔽ひ來た黒雲を見てカルダサの「雲の使」の中に書いてある詩の數章を聲高に歌ひました。其は梵語であつて私には能く分かりませんでした。但彼が我を忘れて歌つた朗々たる口吟の響鳴する韻律だけで十分私は感動されました。夫から又私が能く英語を了解するに至つた前に挿畫の澤山入つたゼ、オールド、キューリオンテーショツプを手に入れました。少くとも、それに書いてある言葉を通讀して其の意味は畧、了解しました。こんな事では大學の試験官は大きなゼロを呉

れるに違ひありません。然し書物を読んで感じたことはゼロ程空虚ではありませんでした。更に又それと同様なことが少し大きくなつてカリダサの書いたときにも起りました。

六 童謡と國語教授

最近の子供雑誌に童謡の掲載されてゐないものはありません。「赤い鳥」の白秋の童謡、金の船の雨情の童謡、その他藤森、西川等の童謡詩人の作や選が色々の子供雑誌に見えてゐます。

殊に注意すべきは、この童謡運動が國定教科書に及んだことでありま

す。

尋常小學國語讀本を調べて見ます。

卷一のサルカニ合戦の章、

ハヤク メヲダセ カキノタネ
ダサスト ハサミデ ハサミキル

といふのは童謡から來てゐます。こゝでは散文詩の中に子供の自由詩を挿入して活を入れてゐるのです。

同卷二一頁の、

デンデン ムシムシ カタツムリ
アタマガ アルカ メガアルカ
ツノダセ ヤリダセ アタマダセ。

の如きは一般的な童謡であります。次に、二三頁のホタルヲ ヨブ コエガ シマスの後には螢來いの童謡を教へるべくかくされてあります。

三五頁の、

ガンガン ワタレ

オホキナガン ハ サキニ

チヒサナ ガン ハ アトニ

ナカヨク ワタレ。

の如きは朝鮮の子供にも在來の童謠として歌はれてゐる位の一般的のものであります。

更に四一頁の「星の歌」の如き、

一バンボシ ミツケタ

アレ アノ モリ ノ

スギ ノ キ ノ ウヘ ニ。

二バンボシ ミツケタ

アレ アノ ドテ ノ

ヤナギ ノ キ ノ ウヘ ニ

三バンボシ ミツケタ

アレ アノ ヤマ ノ

マツ ノ キ ノ ウヘ ニ。

はある地方の童謠を少し語呂を整へたものに過ぎません。
卷二の第三課の「キクノハナ」の章の、

ミゴト ニ サイタ

カキネ ノ コギク

一ツ トリタイ

キイロ ナ ハナ ヲ

ヘイタイ アソビ ノ

クンシヤウ ニ。

ミゴトニ サイタ
 カキネ ノ コギク
 一ツ トリタイ
 マツシロ ナ ハナ ラ
 ママゴト アソビ ノ
 ゴチソウ ニ。

の如きも子供の自由詩と言へば言へませう。

第七課の「ユフヤケ」の章の、

ユフヤケ コヤケ
 アシタ テンキ ニ ナアレ。

の如きは美しい童謡であります。

第二十四課のヒカウキの歌も子供には面白い詩と言へます。

卷三の第五課お花の章の、

ねんねん ころりよ

おころりよ

ばうや は よい 子だ

ねんねしな。

第十一課「五一ちいさんの」の章の、

しごと なされ よ

きりきりしやんと

かけた たすきの きれる ほど。

は民謡ですがこの章では子供と関係がついてゐます。

卷六第四課「きのこ取」の章の、

山の中でも三軒家でも

住めば都よわが里よ。

は矢張民謡であつて童謡と同じ畑のものです。

かく童謡が小學校の教科書にまで取り入れられたのは、やがて童謡が國語教授に於ける重要な位置を占めるやうになつたのを證するものではないでせうか。

尙ほ、先頃の新聞の報するところによると、畏くも澄宮殿下の御作『月に雁』の童謡、

ツキ ニ ガン
 ツキヨ ノ ソラ ニ
 ガン トビテ
 ミヤクン ゴテン デ
 ソレ ミテル。

を拜誦してはほゞ笑まるほどの童心におなづかしさを感じるのであります。そして鳥羽天皇が御幼き折、降る雪を御覽になつて「降れ、降れ、粉雪、たまれ、粉雪、垣や、木の殿に」とお謠ひになつたことを思ひ比べないではゐられません。

私達が何故に童謡に對してなつかしい微笑とゆかしい郷愁を覺えるかといふことを省察してみますと、其は、童謡は第一には土着的であるといふこと。第二は情緒的であるといふことであります。そして、其れが何故に國語教授の上で重大なる役割をするかといふと、其は巧みに情緒をつかひこなしてゆかしい味をほのかに出しながら、餘韻をふくませたほんのりとしたやさしい、みがきのかかつた言葉で子供の心を淨化するからであります。

又子供が童謡を作るといふ立脚地から見ますれば、子供が最も純真な

る表現としての自由詩の創作といふことになるのです。即ち童謡は子供の藝術的創作中最も自由なる表現様式であります。何等の拘束も束縛もが、字數の上にも韻の上にもありません。

そして子供が謠ひ出したものが、そのまま韻を要求し作り出すのです。これが眞の詩の意義にも叶つてゐます。ウインチエスターは、

詩句の美といふことは調子に非常なる關係を持つものであつて、詩句の意と感情とは音樂的となる所の變化ある音の高低を自然に喚起するものである。吾々は之を呼んでメロデーといふのである。(ケン

チエスター文藝批評論植松譯)

といつてゐます。子供は其の自由詩の中にもとより意味と感情とを盛つた佳調を生み出すのです。こゝにも他の詩に見られぬほどの奔放なる自由詩の世界があります。

藝術があらゆるものゝ型を破るやうに、童謡は子供にヒシヒシと詰め寄せる教育の型は破ります。子供は童謡によつて外來から作られようとする殻を破つて伸びて行くとも言へます。この芽生の如何に大事なものであるかは情操陶冶上でも明白であります。更に實例をあげますと、詩人が其の詩作の芽生へは實に子供時代のフハルスト、インブレツシヨンとも言へるものの感情表現に、雀百までの生氣の籠つてゐたことを知らねばなりません。

タゴールは其の第一の詩は幼少の時に誦んだ、

「木の葉はそよぐ、雨は降る」

にあつたと言ふし、一茶の俳諧は、六歳の時、

「われと來て遊べよ親のない雀」

といふ亡き母に對する孤獨の思慕心の表出にあつたともいひます。ホ

イツトマンは、

「私が何か後世まで残るやうなものを書きたいといふ希望を起した最初は一ばいに帆を舉げて走る船を見た時だつた。私は見たまゝをその通に表現して見たい欲求を感じた。」

と言つてゐます。この最初の欲求が後日「草の葉」を歌ひ出したのです。

まことに人間の最初に誘發された詩感位尊いものはないやうに思はれます。そしてクロオチエの説くやうに、「一生を通じて同一の印象が繰りかへされないものならば、私達がかりそめに觸れた環境の印象も決して軽々しく捨て去るに忍びないものがあります。」

そして私達が其の印象のすべてを、そのまゝに表出しておけるものならば、其は洵に美しい意味ある人生の縮圖であります。

ウインチエスターが「人生といふことを高尚に解釋するものは一に詩歌

あるのみである。」と言つたのにも首肯れるではありませんか

藝術的表現は一種の快樂であり聖い人生の事業であります。子供は童謡の創作によつて、疲れたる童が母親の胸にはぐくまれて安息するが如く、それによつて平和の郷土に息ひ、やがて活動すべき準備が出来るのであります。

美的教養は人間性の陶冶に極めて必要なものであつて、その美的教養は藝術教育によらねばなりません。而して藝術教育の中に國語教育を置くのは現時に於いては異論の無きことで、國語教育の眞意義は藝術教育の上に立つて始めて闡明されるのであります。

藝術教育は所詮子供をして眞平に生かすことであらねばなりません。眞に生きることは、子供みづからが大自然の中に立つて、創作と鑑賞とに生きることゝ思はれます。即ち子供の藝術的努力は子供をして眞に生

かすことであつて、やがて子供の自我の確立となると信じます。
西田博士は、次のやうに言つてゐます。

「我々が藝術的直観の立場に於いて自然を見る時自然の背後に見る精神は直ちに自己の精神である。花に對し月に對し之を詩化する時我我は之を個性化するのである。之を自己と爲すのである。

伊太利の夏の夕べ螢のむらがる生垣の間にさまよひつゝ雲雀の聲に感興を得たと言はれるシエレーの名高き「雲雀の詩」は雲雀といふ鳥の性質を言ひ表はしたものではない。シエレー自身の感興に外ならない。而もかゝる感興こそシエレー自身の本體でありかねて深き自然の本質である。(哲學雜誌所載眞善美の合一)

之によれば、子供が折に觸れ機に臨み大自然の神秘の花に其の眞機睿智を感じて謠ひ出す童謠は、彼等子供自身の個性の認識であり、やがては人

格の修養であります。童謠は實に子供が自分の姿を見出した大自然のカットであります。童謠がゆかしい餘情を貯へてゐるのは其の言葉の裏にひそんでゐる人格的内容の深さによるのであります。西田博士は「言語は詩人に於いて色や音の畫家や音楽者に於けると擇ぶ所はない。唯詩人に於いては概念的意識の背後に含まれてゐる自由なる人格的内容をも表現し得るのである」と言つてゐます。

殊に童謠に於いて、何心なく謠ひ出した子供の詩に深い意味を感じるのは、神秘的の子供心が童謠の神機に觸れるからと思はれます。即ち童謠は不可思議なる童心の象徴であります。

童謠に、若しも餘韻と暗示がなかつたならば、それは童謠として價無きものであります。

マルラメが「言語文字はそれ自らに固有の意義があるのでなく主觀の

名狀し得ざる氣分經驗を象徴するところに文字の眞價がある。「名づく
るは破壊で暗示は建設である」と言つたのは童謠に最もよくあてはまる
やうに思はれます。

國語教授上童謠の位置を價高く見るのは、畢竟子供達に唯美の安息を
與へ、其の安息の中に力と希望をはぐくませたいと思ふからであります、
其の上彼等の童謠を創作させることによつて、子供達に偽らざる個性表
現と自然觀察の歡びを味はしめ以て人格の完全への努力に資したいと
も思ひます。つまり、子供達の天賦の藝術的才能をよびさまし、美に對す
鑑賞及び創作する能力を發達させる所の藝術教育の一として童謠をと
りいれたいと高調するのであります。國語教育が其の眞の目的を文學
の享樂といふことにおかれ、創作と鑑賞の能力を磨くものであるといふ
ことが否定されぬからは、童謠が子供の自由詩として國語教授中藝術教

育の高い壇を占むべきことも明かである譯であります。

又現代の子供達は傳統的郷土的の唄の世界——それは搖籃の中に安
息を得る様に其のゆかしい韻律と意味とによつて子供心を美化した—
から西洋流の蕪雜な理窟つばい穢れた所謂唱歌の世界へつれて行かれ
てゐます。それは子供達には非常に悲しいことでなければなりません。
私達は純眞なる童謠詩人の製作を鑑賞しもてはやすことによりて子供
達を本來の童謠の世界へ逍遙させたいと切に欲せずにはゐられません。
子供が眞純なる謠より又謠の中に自己の感興を見出し、やがて非常の満
足を得て其の教養に資するといふことに對して、私達が一指も染めてな
らぬ譯が何處にありませう。私が國語教授を從來の因襲より解放して
自由なる子供の感興と生命ある子供の創作とに生きしめよと叫ぶのも、
かうしたことからであります。其の第一歩として童謠を推すのであり

た。

第四章 人間性の陶冶

一 ひきがへる

今朝も庭前の横の根に、墓が出て居る。私はこの家に移つた時、がらんとした家の恰好と無趣味な家の人達とが私の心から毎日々々ある物を一つ宛引き抜いてゆく様な氣がした。その時分からこの土色の墓が、私には親しき友達となつたのである。私の墓の家族は三匹であつた。父が一匹で、母が二匹だつたと思ふ。其が、この梅雨の頃子供が三人生れて都合六人家内になつた。毎朝横の根元に一番早く出るのは子供の墓である。其から暫くすると親達が出て来る。墓の眼は脊の方に附いて居

るが、私には墓が絶えず後を見て居るとは思へない。實際墓は前面を見て眼をバクつかせて居るのだ。そして未だ彼等の飛んだのを見ない。大地をゆつくり大股で歩く。二足三足毎に少憩しつじつとして目的地まで歩みを續けてゐるのである。雨あがりの槇の枝は時に容赦なく滴を墓の顔に落す。槇の梢の悪戯雀は遠慮なく葉を墓の頬に打ちつける。墓は、しかも悠然として見上げもしない。可愛らしいをかきな手つきで、顔をそろりと撫でて平氣である。そして又歩き出す。

時に家の三毛君が墓にちやれかゝることがある。其でも墓君は三毛のなすままになつて居る。そして三毛が厭になれば例の歩調で、すこすこと行つて了ふので、三毛君も後見送つて茫然としてゐるのである。三毛君は獸の中で卑しいものゝ一つである。爪は常に隠してゐるが、別に鼠を捕つたこともない唯、臺所の隅と座敷の縁先とで午睡するのが能と

いへば能である。然し他人から愛せらるる程度から論ずれば、三毛君は墓君よりえらい。墓君は私が起きたての一瞥と夕暮のサヨナラを告ぐる外親切な待遇を受けたことを知らないが、三毛は常に家の娘達に抱擁せられ、キスの雨に浴びて居る。其の代り、三毛君は小さい女の子の守役として柱に結びつけられたり、頭巾を頭からかむらせられたり、尾に紙片をつけられて馬鹿に取り扱はるゝ時があるが、墓君に至つては眞に自由の自由である。朝から夕まで自身獨創の道を自分勝手の態度で濶歩してゐるのである。前者は愛せられんが爲に束縛せられ、後者は自由ならんが爲めに愛は眼中にない。

私は教壇に立てられてから長い星霜を閲した。今になつて過去の時の流をふりかへつて見れば何だか影のうすい人間として世渡をして来たやうである。秋のほがらかに晴れた空に立ち上る烟は静かである。

ゆる／＼と天空に立ち上る様には何の障りも、何の害もない。私の教壇に立つてからの生涯はあの烟の様であつた。そして私のやうな烟が私の周囲にも幾十條となく立上つて居た。もと烟のことであるから、微風でもあらうものなら其の幾十條の烟が互によれつもつれつ、果ては天には上らずに地に匍匐して終ることもあつた。社交と争論と野心と冷淡とが其の結果となり原因となつたのである。かうした過去のみじめさを鮮かに知つた時が私の墓を見出した時であつた。墓は私に眞の生活を教示した。墓は私に眞の教育者としての心持を與へて呉れた。

二 人形作り

黎明に床を蹴つて刀を振つて彫つて居る人形作りがある。彼は確なる智と巧なる手とを持つてゐる。彼の作る人形は悉く藝術的である。

人の匂ひもある。人の色もある。彼が終日の勞苦を慰めるものは、この完成せられた人形の影像である。然し乍ら彼が人形に對する藝術的努力が其の極に達した時に、彼は眞實其の者でなければならぬと覺出した。人形は遂に人形である。折角人形を作るなら人を作つて見たい。この人形作りは人作りとならうと決心した。彼はあらゆる材料を集めた。精細なる思考を煩はした。愈すすべての準備がなつた時に彼は痛歎した。彼は生靈の準備を怠つて居たのである。世の中にはこの人形作りの様に、生靈の準備を怠つて居る者が少くない。殊に人形作りの補助者たる教育者には頗る多いことがある。由來不可思議なものは多からうが人の心ほど不可思議なものはあるまい。古來幾多の文藝が其の根本を心に求めて居ないものはない。如何に科學が發達して萬能の斧を振りかざしても、この心の領域に切り入ることは出来まい。私が思ふに、心には

力と光とあるやうである。其の光と力とは現今の科學によりては到底磨き養ふことの出来ないものと思ふ。光は光りによりて磨き、力は力によりて養はねばならぬ。教育が人間作りの手助けであるならば被教育者の光と力と教育者の光と力とがタッチせねばならぬ。形式整うて却つて内容空しくなる。具案的のものにはなかなか滲透性を缺いて居るのである。私は教育者として智識を授けねばならぬ。然し教壇は智識の商賣臺のみでない。教壇からの叫びは眞實なる人間の叫喚でなければならぬし、熱誠なる心の聲であらねばならぬ。世界の人類が物質的幸福を欲求する間は文化は極度まで達するであらう。文化の進歩は科學の進歩であつて科學の進歩は分解綜合の精細の度の向上である。かくて世界が愈々複雑の度を進める。而も其の本體の人間は依然として人間である。室内に引籠つた者が突然あかるい廣町に飛び出せば、すべ

てがゴタゴタとして目まぐるしいであらう。これよりさきの人間は複雑なる社會に眩暈せない様な根本的の何物かを把持して行かねばならぬ。心の力。力ある心程尊いものはあるまい。私はこの心の力に就いて話さねばならぬ話がある。其の話は孟子にある孟子自身はある點より言へば辯の人であつたかも知れぬが、彼は確かに心の強い人であつたのには異論はあるまい、其は彼の弟子公孫丑との問答によりても明かである。

三 アンテイ葡萄酒的教育家

經驗は尊ぶ可きものである。そして經驗程自分自身に有り難いものはなからう。故に人達が、總じて、經驗に固執し、體驗を死守せんとする時や、やもすれば保守となる。頑固となるのである。而も我等は經驗其の

者の價值の上に、經驗を積む自分の力を、省察しなければならぬ。浮世を過ぎすだけが榮譽ではない。額に皺が刻まるだけが誇りではない。然るに世の中には恰も葡萄酒の様に、古くなればなるほど價が高くなると思つてゐる人達が多い。私は、かうした人達に、いく度となくめぐり逢うた。そして、其の度にその人達から、青二才として、理窟屋として嫌はれた。思ふに其の人達は時間の経過といふ重量を以て絶えず青年におもしをかけるのである。青年教育家の必要を叫ばれたるや已に久しい。然し老年教育家の氣焰やまた、萬年火の如く消えない。私はこの種の教育家に對してアンテイ葡萄酒的教育家に聲援したい。

シユライエルマツヘルが「植物自身にとつては最高なるものは自己特有の存在の美しき完成たる花である。世界にとつては其の最高なるものは次の時代の幼芽の爲の莢でもあり、又凡ての獨特なる生物が他の自

然界が自分と一致する爲めに提供しなければならぬ贈物である所の事實である。かくて亦人間にとつて最高なるものは青年の快活なる生命である。而して若し、其が彼から去れば彼には實に悲しいことである。然し乍ら世界は果實がより速い丈け、よりよく熟する爲めに人間が老いてあれかしと希つて居る」と曰つて居る。何故世の中は青年に對して早熟せよと望むことの酷であらう。其の嚴なるが故に偽善が生れ、若年寄が形成する。完成は望むべきものなれども、もし其が人をして、ひきこみ主義、ひかへ主義、反努力主義に傾く時は餘り望ましいことではない。

昇りつめた亢龍には悔があり、握り得た寶玉は一時は嬉しいが後に續く樂はうすい。私の網膜にうつる教育界の先輩は餘りに完成をのぞみ過ぎはしないか、この種の教育家は嘗に其の部下若くは同僚に、この様式を以て臨むのみならず被教育者に對しても亦この範疇をおしつけたが

るのである。かくて憐むべき兒童等は生氣なき教師の手作りの花と咲いて凋むのである。

四 この「はら」

紅茶を啜つて居る中に、思念がふら／＼と湧き昇つて、果は紅茶の匂ひと一緒になつてしまつた。そして教員といふ現實から、教員でないといふ非現實の域に脱越した。そこで始めて教員といふものゝ、みじめさ加減がわかつた。

私がまだ、學校に居た時分、倫理哲學の博士が、教育家は自重せねばならぬ。現今の教育家達には餘りに自重心がない。コレでは我が國の教育を奈何と絶叫されたことを記憶する。なるほど其の時は合點して、一つ私が社會に出たら大に自重してやらうときめこんだものだが、矢張り

教員は惨めなものゝ一つぢやないか。

セチ辛い世の中は、教員には一層セチ辛くなる。先生といはるるほどの馬鹿でなければつとまらない。

心はいくら高くなつても生きて行かねばならぬ。

眼はなんぼ肥えても眼の下の方の横切をどうする。

心と肉との争闘は、教員が人間である間絶ゆることはあるまい。

教育と職業と——人間を作ること、人間が生きてゆくことと——この間に何等かの解決がつかぬ中は、教員も眞の教育的生活を營むことは出来ない。

ここまで考へて來ると、不圖視線が字書棚におちる。字書をとりにだし「はら」といふ字を引いて見る。

第一に、胸腔の横隔膜以下胃腸などの内臓を包める所とある。第二に、

こころばせ、かんがへ、とある。腹が太い奴は内臓器管が太い奴ばかりでなくて心の太い奴といふことになる。第三に出て来る。度量、膽力も矢張り腹が太くないと駄目だ。腹が減つては何事も出来ない。何だ膽玉の小さいことを言ふなと叱られた所で、元來このやせ腹で何が出来た。腹を養はねば心は養はれぬ。腹が太くなつて、始めて腹をかかへて笑ふことも出来る、はらを合せて何事も爲すことも出来る。もとはこの腹だ。腹だ。腹がすくから腹もたつ。腹が常にふくれて居れば、腹に一物のもち所もない。野心も憤怒も腹がすいて居るからのことだ。軽いものは飛び、重いものはおちつく。腹をすえて、仕事をさすには腹を重くしてやる必要がある。

教育のことも亦然りである。どの教員を見ても概して腹が小さい。便々たるこの腹よと我が腹を撫する時が教員の眞のハマリが出る時である。

ある。
教育尊重論は何時でもとなつてあがる。然し乍ら、焔は遂に焔である。焔の跡には灰のみが残る。灰が下に残つて焔は上に燃える。焔の焔は上部にあつて下部にはない。地面に匍匐する者は、終に灰に埋まるだけである。私は教育界のために、コノ「はら」の問題が、現今教育家達のはらの中にないといふことに堪へられない。

五、芋 頭

廣い世間を見渡せば、ヤレ耶蘇教だの、ヤレ佛教だの、神道だのと八釜敷く宗旨争ひをする者が多い。信仰に生き信念ある生を送る爲には、宗教は必要のものの一でもあらう。然し私達は人間といふものに眞我を彫りこむことを片時も忘れてはならない。

真我なき人は人間として、何の價值もない。されど見よ、宗儀についての難當漢も、世俗宗の宗徒から免かるることが出来ない者が多いではないか。世俗宗はコンベンションを綱領として、妥協、雷同、諂諛を條目としてゐる。彼等は常に上者に對しては叩頭と歡笑とを以てし、下者に向つては點頭とニコボン式を應用して居るのである。あの人に濟まぬ、この人によく思はれよう、かうしては世間體が悪い。かうしたことが、かかる人達の頭の全部を占めて居る。そして遂に活きた、鮮明な人間としてこの存在の意義を消失して居るのである。

勿論人間が社會的生活を營む以上、自己の環境の社會に對する用意は肝要であるが、審かに考ふる時に、私達はある範圍に於ては決して社會から餘儀なくされるべき者ではない。私達は國民としての立場に立つてゐる以上否、眞の國民を通じての人間として各個人が自己のミタコロコス

モスを擴大させて、最も内容ある宇宙を形成せねばならぬ。かうした意味に於て人は飽くまで自由であり眞に人生は楽しい者である。

天心に遊ぶ寒月。げに、其は清明であり且つ自由である。

宇宙に生々發展する人。眞に其は尊く且つ自由であらねばならぬ。

世俗宗の人達よ。自ら何處に「自分」が在るかを顧みよ。斯く顧みて「自分」の影の極めて薄いこと、或は其のうすい「自分」すらも發見し得ざる時、果して如何の感がある。私をして眞乘院の盛親僧都に就いて語らしめよ。

盛親僧都はやんごとなき智者であつた。そして芋頭といふものが好きで澤山食つた。經典等の講釋をする席でも大きな鉢に堆く盛て膝もとにおいて其を食ひ乍ら經典もよんだ。病氣でもすると、七日二七日位療治のためヂヤとて一室にひきこんで居て、思ふ存分に上等の芋頭を選んで、澤山食べる。其れで以てどんな病でも直してしまつた。決して人

にやつて食はせることはない。常に自分一人で食べて居た。この僧都は非常に貧乏であつたが、この人の師匠が死ぬ時に、形見として、錢二百貫と僧房一棟を譲つた。

それをこの僧都は、その僧房を、百貫で賣りとばしてその代と遺産金の現金とを合せて三萬疋の錢を得たのを、芋頭の料として、之を京の人に預けおいて、十貫宛取りよせて、芋頭を腹一杯食つて居たが、そのうちにみな食つてしまつた。時の人達は「三百貫のものを食しき身に儲けて、斯く計らひける誠に有難き道心者なり」と評した。この僧都は容貌が美で力が強く、大食する人で、且つ筆蹟も學問も辯舌も人に勝れて、この眞宗の中の善知識であるから、寺中の人々にも尊重されて居たが「世を軽く思ひたる曲者」で、萬自由にして大方人に隨ふことがなかつた。どこへか出張して馳走にあふ時でも、外の人達の前へ膳が皆行き渡るまで待つて居るだけ

の遠慮もしないで自分の前へさへ膳が來ると、直ぐ獨り先へ食つて、歸りたいと思ふと、失禮とも何とも言はず、思はずにと「ヨイ」と歸つてしまふと云ふ風であつた。またひどいことには、平生の食事でも、一般の人達のやうに時を定めて食はないで食ひたい時には、夜半でも明方でも食つて、眠い時は、晝間でも部屋へ走りこんで床に入つてしまふ。寝こんだらどんな大事件があつても、人がさう言つて起しに來ても、人の云ふことなんか聞かないで寝たいだけねて居る。眼がさめると、又幾晩でも寝ないで心をすまして方々超然として歩きまはるといふやうな風で人並でない有様をしてるけれども、それで人からは嫌はれず、何をして人も人は咎めなかつた。評者は之を「徳の至れるけるにや」と言つて居る。

盛親は確に奇人である。芋頭をあまり食べたから奇僧となつたが、奇人の盛親が芋頭を食つたのか、話は徒然草にあるが、とかくアタセクして

る世間を超越して居るこの僧には何等の束縛がない。其の所爲か、竹林の七賢等の様に白眼以て世上の人を視る底のこともない。至つておぼやうに、至つてするするとした顔の美しい大きい坊様の様に私の眼にうつるのである。

私は教育家として、この僧都を、推賞措かぬものでは決してない。然し乍ら世俗宗徒の多い、教育界にはかかる僧都は、或は蓋鞋の用となりはしないかと思ふことは切である。

六 ちやつた世の中

風疎竹に來りて、さわくと聲あり。風疎竹を過ぎて竹林静寂の境となる。這箇裡、自然眞理の暗示がある。境は人を作るもの故、郷に入りては郷に従ふも、人の世としては萬全の策でもあらうが、自己の居る境より

脱俗的氣分をもつは、眞の人間としてゆかしいものである。故に蛆は便所のカメを出でんとし、蟬もヌケてからは樹枝にかくる。

腐るは臭きより始る。教員も教員臭きは腐るの始め也。若し教員に教員くさかれと強ふる者あらば、其は教員であり乍ら教員に似合はぬこととはよせといふ意にて、教員といふ箱詰めになれとすゝむる者では、よもあるまい。然し世の中には、随分自分から箱の中に入つて行くものが多い。すべての言葉には、ダスとかデイとかデイヤとかの代りに教育的とか教育上とかの冠詞が附せられる。其の文法の流行して居る地方では、この冠詞もさして耳だちてはひやかぬが、一度他の地方に行かんか、其の四角な形式ぶつた、そして説明的の匂ひが生ずる。

むかし一天下こぞりて、茶湯なる時代があつた。其の世の人は、郷黨お茶なきには語らず。室お茶にあらざれば入らず。割截お茶にあらざれ

ばくらはす。道具書附なきは買はず。すかさぬはお茶と稱しぬかれはお茶がないとそしる。よい女房は書院もの、いけぬ妻はさびもの、利休はし、利休下駄、大工、中瀬、八百屋、魚屋も、草鞋のき捨つるより、花月のふだとりて、すり足のたちふるまひ、是をちやつた世の中と心ある人は言つた。これは「くせ物語」の話だが、餘りはまり過ぎると出口を失ふ。融通がきかなくなる事は、コリスギルからだ。教育のことも、水車の様に半分は水中に半分は空中にないと到底廻轉が出来ぬ。あまり教育的々々とばかりレツテルを貼つてると教育的でなくなる恐れがある。本を読むにしても、讀むための讀方は効力がうすいし、教育も教育のための教育は人間の教育から遠ざかつて来る。これについて今一つ「くせ物語」から話しをしよう。

むかし藥あきなふ人の、醫者かねた者があつた。この人は傷寒論や金匱、素難、千金方のやうな貴い理も知り、又醫通、温疫論など後の世でも、大層よい書を読んで居た。然し乍ら藥價においては、何十錢、何厘など、あからさまであつたから、世の中の人は大變心やすがりて、初めには、先づこの人に、たのんで居た。故に世の醫者達のため悪くして、密かに妬む者もあつた。ところがやう／＼行はるるに従ひて髪を立て、頭をまろげなどして、醫師の列に入つたので、おほ方は、はやらぬやうになつてしまつたといふことである。

よく考へると面白い味のある話だ。

七 閑適の境界

私は、教場の戸を明けると、思はず顔の筋肉がゆるむのを感じる。青い芝生の中に、棟と棟との間を繼ぐために石が敷いてある。松と楓とが、石

の道の上におほひかかつてゐる。私の左足が此の足の上に落ちると、右足が一と長い調子で敷へ始める。そして一二と足の運ぶに従つて、計算するのだが、未だ終りまで敷へたことがない。其の癖其の石の敷は二十より多くはないだらうと思ふのに、幾何か確かな敷は、今に、一年半間ばかり、歩いてるが、はつきり覺えない。常に第一番目の石丈は敷へるけれども、其の先になると已に閑適の境界を歩いて居るのだ。私の考へでは、人間では閑適の境界に立つものが、一番幸と思ふので、其の閑適を、暫時なりとも得たいと常に思つてる。故に、私がこの敷石の上に、計算を忘れて立つてる瞬間位尊いものは無い。そして、私の足が軽く、敷石をふむ時に、私の頭は、あれやこれやと、十七字の形をかたちづくつて居る。私が教務室の自分の椅子につく頃には、もはや、十七字の形が出来かけて居るが、周囲のとよめきで、又ふら／＼と何處へか逃げて行く。私は惜しいことをし

たと思つて、其の句の跡を追つかけるが、一向追つつけない。やつと追つついて、筆をとりて、細かい片紙に、書かうとすると、始業の鈴が鳴る。アッ、又、とりながした。

これちや到底閑適の境涯どころか、ゆら／＼と海月のやうな生活になると馬鹿らしくなつた。そこで、今度は私の最も好きな、猿蓑を第一句から考へ始める。

一體、六ヶ敷いことの嫌いな私は、歌や文や句の解釋でも自分で好きな様に考へて見ることが好きだ。先づそれには俳諧が一番適して居る。

鶯の羽も刷ひぬはつしぐれ、

といふ句で、時雨のせう／＼と降つてる中に、鶯が羽を刷うた様が見える。鶯奴、横を向いて、ギョロツとあのいやな眼つきで、時雨がパツと散りたらう上には、枝が茂つて居たらう。然し初時雨だからさう長く降り相

もなからう、なんととくだらぬ事を思ふ。困るな、私はちつとも容を正さないのに、人として容を亂すと鳥にしかすと、いやに頑に思ふと、次に直ぐ一ふき風に木葉しづまる、
と附けてある。翁は矢張りうまいと思はず自分でもつてゐた。チョコ箱をガラレと打つ。なるほど、一嵐木葉を亂して、時雨した後、羽ふるひして刷ふ様だなアと合點が行く。

股引の朝からぬるゝ川越えて、

ヤツ凡兆も却々突飛なところに想を走らしたものだ。なるほど、飛び来る木葉に笠傾けてためらふうち靜になつたからサア行かうと進み行く體を見たてたなア。ところで、水が出て、橋が落ちてゐるものだから、川邊に佇んで風の絶え間を待ち股引をぬいでると又風が吹くから、コノ暇を股引ごしに渡つたので、ズズ濡れになつてしまつた。其れが少し寒く

なつた。今日は朝から運が悪いやとこぼしてゐるのが、いよゝ／＼巧みだ。其の先は

狸をおとす篠張の弓

まひら戸に蔦這ひかゝる宵の月

人にもくれず名物の梨子

愈入つて悉妙。自由自在に、我儘勝手、自分の好きな様に解釋し連想し、一人で悦に入つて居る。と後に居るA君が、どうです君、この時間は授業はないのですかと肩をぽんと打つ。ここで、閑適の天上から、實在の地上へゴロリと落ちた。丁度、朝御飯を食て居る時に、がりツと石粒にかみあてた時の氣持だ。そして矢張この一等米にも石が入つてるナアと思ふと同様に、矢張り、救へねば食へぬ人間だつたのだと悟る。

八 根と花

余の友、素光菊に精し。余一日閑暇を得て、素光と菊を市内愛菊家の前に見る。余固より、菊花の眞を解するにあらず。素光によりて、其を啓導せられんと欲する也。平日、遍歴して十數軒を訪れぬ。素光は、職掌柄其の審美を囊を充たしたるを喜び、余は空腹と疲労との餘りに大なりしをこぼす。歸來、爐邊に倚りて、番茶一喫すれば、ここに始めて、紅黃白の麗姿仙態悉く眼前に髣髴してその情味言ふべからず。聞く、熊本の菊や、其の花單重にして、雅且品あり、花のみを以て美を審かにする時は他地方なる久留米、京都の其に劣らざるやも保し難し、唯其れ、葉の風あり、幹の楚楚たるに至りては蓋し、その比を見ざる可しと。而も這箇の莖、這箇の花を得んと欲するや、殆ど、一年許の日月と手入れとを、其の床地と根元とに施

す、勢力を吝むべからず。かくて始めて花を観る可く、莖葉を賞すべし。凡そ、花を美ならしめんとせば、その幹を養ふ可く、幹を直からしめんと欲せば、其の根を培ふ可く、其の根をよからしめんとせば、勢、其臺地を肥やさざるべからざるは理の當に然る所なり。然し乍ら、世の多くの花を観るもの徒に上部の花のみを歎美して下部の莖根を賞するを知らざるもの多し。余敢て唐宋の文人に擬せんとするには、あらざれども、菊の事によりて、教育の事に感觸せざるに堪へざる也。

現代教育を観るに、美麗なる花を咲かしめん爲に、如何に努力せられつつあるかを思ふ時に、うたゝ長大息せざらんと欲するも得べからず。見よ、教授法の花やかなる、教壇は恰も一つの檜木舞臺の如く、教授者は、聲色こそ用ひざれ、粉飾こそ施さざれ、一の老練なる俳優然たるに驚かざるも數ふるにあらずや。而して何々研究授業、何々批評授業と言はば平

生のやり口とは是非異なる献立をなし、參觀者にアツと言はせ、教授の對稱者をして應接に違あらざらしむる程眼をまはさするを以て成功となすものの如し。勿論、さる教育評論家の言ひし如く、或る教場を參觀する時、特別に參觀向きの授業をなし又顔あからめ、衣襟とりつくらふ等のこととあるは、參觀者に對するの心あるものの如く却て愛敬あるべけれど、若し教授法の進捗の結果餘りに眼ぐるはしき授業となり了らんには、ゆゑしき大事なるべし。而も菊の花のみの讚美者はここにも多くあるを如何せん。

教育のことを以て河原に眞砂子を積むに喩へ得べけんか。兒童等は、其の幼稚なる脳力と、薄弱なる勞力とを以て、一砂又一石、戦々又兢兢、精細なる注意と、いぢらしき忍耐とを以て智の城を築くといふことを得可し。彼等の前には河流は妙なる音樂を奏し、彼等の後には花原廣々香氣、郁々

たり。而して彼等の智の城を築了する迄は、彼等の側腹舞踏するを許さず、彼等の前後にあはたしき振舞を演ずるを禁す。其は彼等に對しては賽の河原の鬼以上に慘酷なることなれば也。

教授法の研究や大によし。而して余は其が花を大且つ美ならしめんが爲めに根を培ふ底の献立なる時に大賛成の聲を發するに吝ならざるなり。

この事たるや、唯一時間的の授業に留まらざる也。若し夫れ、長き時にわたれる教育に就て論ずる時に試験の大立物の前の舞踏的教育の花々しくして而も其の效果のうすきと、教師の活動のみいさぎよくして、兒童の行動の遅々たること牛の如きとに至りては、更に贅言の用ひ所を知らざる也。現代教育者達よ、乞ふ思ひを三たびここに致されんことを。多謝。

九、豆本退治

賣らねば商賣がたたぬし、讀めばステキに面白い。價は易い、菓子を喰へば、いやし坊とけなさるるが、書物の形をして居るから讀み耽つても、或は讀書家の名を取ることがある。

かうして、豆本は、尋常五六年より中學の一二年頃までの少年の間に勢力を得て行くらしい。

今試みに書店の棚邊に、豆本を調べたならば小冊子の目録は充分作れる位多いが、差當り、私が私の知つてる生徒の机上に積んである豆本の名をあげてみようか。其れによりて大體少年間に如何なる豆本が歡迎せらるるかがわからう。

恨みの幽霊、後藤又兵衛、濱松城闇夜の亡霊。塚原主水。怪談競べ。神

調小次郎信行、木龍來太郎、高浪八郎、幽霊堂怪猫退治、英山金吾、由利鎌之助、真田小天狗、怪童夜叉丸、穴山小助等である。今少し詳細に言はんか、以上は大阪の榎本某の發行にて、極めて小形二寸に三寸位の豆本である。これは最も廉價の所謂榎本文庫でナンデモ一錢に二冊買はれるらしい。種類は英雄譚を書いた英雄文庫と、怪談を書いた怪談文庫とに分れて居る。英雄文庫の方は四版まであつて七十部ばかりになつて居る。これで最も喜ばれるのは忍術使ひの類である。怪談文庫の方は十部ばかりあらう。(大正七年調)

この他、講談文庫といふ一冊二十五錢位の立派なものもある。之は種類も多く、冊數も夥しい程ある。

然らば何故、この種類の小冊子が少年間に歡迎せられるかといふ事は私達教育家の一考慮を煩はすべき價值があると思ふ。私は茲に内外の

二面より考へて見たい。

内面から説けば、少年の讀書慾に歸することが出来る。この讀書慾は未だ趣味了解の程度の幼稚なる少年には責むべからざる即ち事件の變化に富む物語より受くる快感と、自己修得の讀解力を以て、一部の書を讀むといふ言はば自己の能力の認識より來る快感とを以て、成り立つて居ると思ふ。

外面からの私の見方は、價がやすいと云ふことによりて、割合に購求上の機を得ることが多いと、この小さい可愛い豆本の表紙を施こしあることと且若し他の友達等がこの種の豆本にある事柄を知つて居て話す時に、自分も知りたい、又知らねば何だか自分が詰まらない様な氣が起ることや、活動寫真から來る衝動やが一緒になつて、豆本を讀むといふ段取りになると思はれる。

勿論以上の見方とて、少年と大分、年齢の異つてゐる私の頭で考へたのであるから、到底少年の眞の心理状態はわからう筈はない。然し私達はこの豆本問題に就ては精細に注意する必要がある。即ち、少年のこの種の衝動慾望は徒らに抑壓すべきものではなくて、是を良き方面に導かねばならぬ。私は今少しこの豆本退治に就いて書いて見たい。

私の見る所では、豆本は春から夏にかけて多く讀まれる様である。大人連が享樂に酔ふ時、小人達は豆本に酔つて封建の昔の國にあそび、怪物屋敷に彷徨うて居る。

殊に退屈しのぎのため、夏日のうきときや、梅雨期の鬱陶しき時には、少年の頭は殆んど、猿飛佐助や、猿飛佐助が占領して居る時が多い。教場でも、さんじゆつ(算術)をやると言へば、にんじゆつ(忍術)をやるとして、指を以て胸のあたりに呪文をかき、私と言へば、身共と呼び、友を追ふにも、己

れつ殿様の御敵、覺悟をセイツと呼ばはる。時に自由に少しおどけを使はるべき作文でも綴らせたら、豆本より得たる句を見出して、添削の朱筆を持つて茫然たる事が屢々ある。

これは全国の少年間に大に流行することであつて、其の弊害はこゝに云々する必要もない。今年でも、曾て國民新聞に寫真版まで添へて豆本の弊害を掲げたことがあつた様に記憶する。最近では、國語教育といふ雑誌に主張として、少年文學についてといふ題のもとにこの少年の讀物を論じ、豆本の害を説いてあつたやうに思ふ。

凡そ日本の家庭では兒童の讀物、少年の讀物については充分に考へて居らぬ家庭が多い様である。一部の雑誌にしても一冊の畫報にしても、ほんの玩具代用として子供が泣かぬ爲めのすかしものとして、或は中流以上の家庭には、畫報や雑誌は二三部あらねばならぬといふ位の所だと

つて居る家もあると思ふ。これは豆本には關係のないことであるが、私の受持の男生徒で常に私といふ字の代りに妾とかく。成績もよい生徒であるから不思議と思つて居たら、其の生徒は家は女ばかりで婦人雑誌が多いところから、ちよいちよい、かすり見て、そんなわかりきつてる間違ひをやつて居たことがわかつた。其の他綴り方の形式語句等に、その家庭の影響は著しい事である。

少年が本を讀むといふ事はよいことである。私達はこの讀むといふ習慣は決して子供からなくしてはならぬ。それで、今私達が少年に豆本の如き、つまらぬものを讀むなど強ひる事はよく考へると無理な相談である。何となれば少年は學校の教科書でも飽き足らない。又現行の小學校の教科書で充分と思つて貰つては困る。獨逸あたりでは、よむべき教科書の量も多いさうである。其の上少年文學がたんと出來て居て、安

心して充分に讀ませる事が出来るが、日本では少年文學として推賞すべきものが少ない。是は中學校の生徒も同様で、軟文學にかぶれるな、小説は害になると言つた所で、之に代つて、彼等の趣味感情に満足を與へるものを提供せぬ間は駄目である。

故に私達は家庭の人として又教育者の立場として、殊に恐る可き弊害あるこの豆本に就いて考へ如何にして豆本退治に成功するかを慮ることが目下の急務と思ふ。

一〇 沈 思

右手をのばし、地上に轉がつてる程よい石をとりあげ、拇指を下から人指と中指とを上からおさへつけて、これで愈々きまつたと思ふ時さげた右手をぐるつと頭上から頭後に廻して、はしつと投げる。投げられた小

石は力を人から貰つて飛び出すが、空中を切つて進んでゆく時は自分の力で進んで行く。そして自分の力と空氣の抵抗力と一様になつた時に再び地上にゴチリと落ちる。矢張り地上のものであつた。初め投げる時には的はあつた。投げた石が的まで行きつけぬので、後には無暗になるのみである。石の方から言へば、位置の轉換で、自分の方から考へると力の認識である。私は今まで十數回、手頃な小石をなげつけた。然し一つも的に中らなかつた。そして今始めて、自分の力を知つた。霧をつんざいて出る秋の日の烈しさが眼を刮る様につまらないといふ感が自分の胸をくさらす。石が的に中らぬのは石が悪いといふよりも投手がつまらぬからだ。

石が地上に、徒に、落ちた時は、自分の力と熱とが外部の冷笑と反抗とに一様になつた時だ。

この時になつて、自分の力量を再び測定し直さねばならぬ。

紅葉の紅を盡して晩秋に燃えんとする時は、最も世を慨し、人の行路を考ふるにふさはしいシーズンであつた。晩秋を抽んずる數株の楓葉は、校庭を紅にいろどつて居る。踏むには惜しい。ふまねば通れぬ。越えねば教場に入れない。

紅葉をふんで教場に入り、紅葉をふんで教務室にかへる。

かくて聖い尊い使命が私達の胸に一日一日とはたされて行く。

紅葉もやがて散りつくして寂寞肅々の期に入るだらう。尊い使命をもつ私達はつまらぬ石を投げることを暫くやめて、沈思の城に籠り、沈黙の扉を閉ざさねばならぬ。そして又來る春の恵みを待たう。人の子の爲めに。人の親の爲めに。(大正七二)

附 録

第一章 朝鮮に於る國語教授の批判

一 國語教授の眞意義

一石又一石と築きあげた殿堂の基礎に、設計者の思ひも設けぬ誤算が忘れられてゐたことを考へることほど痛ましいものはない。

朝鮮に於ける國語教授の現状を観する時、私はかうした恨を長うせずにはおられない。

朝鮮に於ける國語教授に就いては、何人も皆其の成功を謳歌してゐる。

かりそめにも、玄海灘を渡つた旅人が釜山に上陸して鷄林の地を踏んだ時、白衣の新同胞殊に愛すべき朝鮮の子供達が流暢な國語を以て、談笑するを見ては、異國で遺物を見出した時のやうにしみじみ自分の言葉になつかしみを覚えるだらう。そして、我が國が殆んど始めての試みとして異民族に對して施した國語教育の效果に驚くに違ひない。

實際彼等は平生國語を朝鮮語でクゴと言ふべき筈なるに、朝鮮語(テウセンマル)と對して日本語(イルボンマル)と言ひ乍らも反復と生活の重みで、一種の不完全であるが所謂流暢な國語を使用し得るのである。

願れば、明治四十四年の秋朝鮮總督府が訓令として、朝鮮教育施行規則を出してから殆んど十年に餘る歳月を閲した。其の普通學校の方針を定めては、

普通學校は初等の普通教育をなす所にして其の本旨とする所は兒童

の身體の發達に留意し、國語を教へ德育を施し以て國民たるの性格を養成し云々。

として、十三道の小國民に大和言葉を使用させることを、生命から二番目に置いたのであつた。

且つ其の學科目の部に入つては、更に進んで、

就中國語は國民たるの性格を涵養するに必要なものみならず、日常生活上必須の知識技能を授くるに於いて缺くべからざるものなるを以て、之が教材は修身、歴史、地理、理科、實業、家事等に亘り努めて日常生活の用に資せしむることを期すべし。

と指示して居る。是即ち、言靈の幸はふ我が國語を朝鮮民族に扶植する事によつて、大和民族と近い性格の人間を作らうと欲したのが本則で、其の副として、朝鮮の文化を高きに導くために、國語を通して彼等に知識

技能を授けようとしたのである。そして其の結果朝鮮民族は主にも副にも幸福であらねばならなかつたのである。

かうして歴代爲政者の熱誠によつて、殆ど奇蹟とまで稱へられた所謂同化の過程が、十年の平穩な月日の流れで來たのであつた。

若し、今にして、前の十年と後の二年とを區劃づけられるとしても、朝鮮に於ける國語教育は確かに豫期以上の効果を收めて居ると言ふ事は敢て失當の語ではあるまい。但、内鮮同化と言ふ標語が内鮮融和となり朝鮮人の幸福への進路の研究、朝鮮の文化増進となり、朝鮮は朝鮮として充實し、内地は内地として充實し、而後渾然融和して帝國がもつ東洋の平和維持といふ使命が、徹底的に考へられる様になつた今日では、國語を通しての文化生活の向上といふ一面にのみ國語教育の成功を負はせねばならなくなつた事も否む譯にはいかない。

茲に私は暫く、國語が其を使用する民族の性格に與ふる影響に就いて歴史的の考察を敢てする必要を感ずる。

さて、言語と思想との關係を審かに見んか、言語學者マキシミュラーは、言語と思想とは全く、離るべからざる關係を有するものである。吾人の考慮判断は皆言語の力によるもので、若し言語がなかつたならば吾人は、白黒の簡單なる思想をも確かにすることは出来ない。故に思想なき言語は只死したる言語に過ぎないし、言語なき思想は無いと言つてもよい。言語なきときは思想は獨立に存在することは出来ないから、思考することは畢竟心中で低く物語る事で、話すことは所詮高聲で思考することである。

と言つてゐる。この説に増補して、ホイットニイは、言語と思想とが互に相俟つて全きを得ることは明かで、吾人が思考す

る時、常に言語の助力を借ることも事實ではあるが、直に言語なき時に思想なしとは斷言されない。例へば未だ言語をもたない子供にも尙よく食物の味を知ることが出来るし、又言語を有する大人にても砂糖の甘味を説明し得ないこともある云々。

と補足してゐる。兎に角、ある思想を言語によつて表現する時に、其の思想の大部分が其の言語の器に盛られて、役目を果すことは言語學者の説で明かであるばかりでなく、私達が日常経験するところである。そしてその言語が常に同種類のものであり、自分の生れた大地と親しみがあるのである時、地理的、歴史的、政治的に國語に對して非常なる親和力を感じるのである。馴れること、親しむことは了解であり、愛であり、而して生命であり得る。かうして國語は其の國民の思想の大部を表現する唯一の道具として、最も親昵なものとなつたのである。

かくて、國語は之を語る國民の精神を傳へ、其の國民が抱ける思想感情を發表し且子孫に傳へるものである。そして私達は先人達が用ひた同様の國語を用ひることによつて、其の音調の美をなつかしみながら其の思想感情に共鳴を感じて、以て國民性格の涵養に資するのである。それ故に、その國民の存續する限り國語は残るべきものである。

かく論ずる時は、國語はその國民精神を傳道すると同時に、その國民を教養しつゝあるとも言へる。

されば、その國民が本末を誤りて國語を輕んせんとする時には常に、國語が高調に呼ばれる。上田博士が「國語のために」國語は皇室の藩屏なり。國語は國民の慈母なり」と高唱して警醒したのもかうした時であつた。

過去の獨逸が富國政策に成功した其の一因には彼のマックス、フホンシエンケンドルフが歌つたやうに、

國語よ、國語よ、我が口に始めて入りし我が言葉。蜜のやうな愛ある言葉。たとたどしき言葉。あはれこの愛すべき言葉！我は永久に汝を忘れじ。

といふ愛着の念があつたに違ひない。フンボルトが言語哲學を形成し、我が國學者が大和言葉に無限の愛情と神秘とをよせて、遂に、言靈とまで稱へたのは蓋し無理からぬ事であつたらう。

かうした國語の過去にひいてゐる長い歴史のゆかしい糸と其にまつはる國民的情操とを無視して、國語を一種の文化生活への方便としての言語と見る時に、明治六年の頃、森有禮氏が日本語の不規則不整頓を歎じて英語を以て授業語としようと言ふ意見をもらしたやうなことが起る。(そして、この時はエール大學のホイットニイ教授の諫止によつてその無謀を覺つて止めた。)

所詮現在では國語は其の國民の生命であり、國民とともに發展すべきものであり、遂には人類の平和にまで役立たねばならなくなつて來たのである。

於是私は再び朝鮮に於ける國語教授に戻る。

そして、朝鮮民族にも彼等の朝鮮語があることに覺到する。而して社會が進展し、時勢が複雑になるに従つて、種々の力によつて幸福である爲めに、大きな意味の國語として、日本語を以てしなければならぬことに思ひ及ばずにはゐられない。

然し乍ら、過去の保守的、防禦的國家狀態に即しての考案は、現代の社會的人道的大國民的の生活様式に就いての考案を制限する事は出來ない。一國をなすが故に心すしも一國語を用ひざれば其の思想感情の表現に支障を來すのみかたまる譯にはいかない。

兩種類の語を用ゆる兩種族は、互に其の語に愛着を感じながら、而も大なる人類生存の目的に向つて渾然一融する所があるべきであらう。

恰も夫婦各其言葉を別にしても遂には互に其の意を了解し其の感情上にも自然に愛情の湧出する例が世に數多くあるが如く。この意味に於て朝鮮に於ける國語教授の其の目的は、内鮮融和の上に築かれる大國民性格の涵養に資せんとする努力であつて、兼ねて朝鮮民族の文化生活への向上の方便と言ひ得ると信ずる。

二 國語教授は果して成功してゐるか

朝鮮に於ける國語教授は成功してゐると言ふ。然らば如何なる方面に成功してゐるか。私も言語教授としての讚辭を吝む者ではない。然し現在鮮人が國語に對して幾何の愛を感じてゐるだらうかに思ひ及ぶ

時に、現實暴露の悲哀を覺える。

さはいへ、普通學校の兒童がよく國語を語り、文を作り、高等普通の生徒が指導によつては和歌までも作り得るのを見る時には、猶國語教授の一面の成功を疑ふことは出来ない。

今其の原因を考ふれば、

鮮兒の方より見ては、

- 一、彼等は先天的語學に才能があるといふこと、
 - 二、内鮮兩國語に其の組織の類似點の存すること、
 - 三、漢字の存在が大に助力してゐること、
 - 四、時勢の要求と民族性、
- を數へることが出来ると思ふ。

一度鮮兒に教へた經驗のある人は彼等が如何に語學の才能に恵まれ

て居るかを知るだらう。彼等が普通學校に入學して一學期にして授業語に不自由を感じなくなり、四ヶ年修業後内地人の商店に番頭として巧に國語をあやつり、其の服装を變じては、往々内地人をして鮮人か否かを辨せしめなくなる。是等の能力の下には彼等種族にのみ恵まれたる記憶力の優秀なるによるのである。

私の浅い経験から見ても、一週二時間の隨意科の英語科を、ほんの二學期間習つたばかりの女子高等普通女生徒が、學藝會に出演する英語暗誦インツブ物語を四頁やつてのけたのに驚いたことがある。

彼等が豫期以上に國語の形式練習に好成绩を示すのは蓋しこの記憶力によるのであらう。

次に國語も朝鮮語も其の語系としては、同じくウラルアルタイ語に屬するは勿論。其の文章組織に於て主語説明語其他補充語等の位置が

よく國語と似てゐる。即ち英語や獨逸語や支那語のやうに、返らないのは餘程語學修練上に好都合であるらしい。

尙其の兩語の出所に就いては、言語學上の問題で、金澤博士の『日韓兩國語目系説』に、軽々しく同意することは出来ないとしても、其の組織根源に類似の點が多いことは明かなる上、内鮮兩語の交渉の多いこともいなむことは出来ない。(これに就いては最近小倉氏の『朝鮮語學史』がるる)

其の他、朝鮮も内地も第一期の外國文明は主に支那文明であつた爲め、漢文、漢字が言語上の重要位置を占めてゐる點や、更に、朝鮮の民族性として根本的に他國語に順應した事は歴史的に證明されるであらう。彼等の耳、彼等の唇はなみ／＼ならぬ鋭敏さを以て外國語をうけいれるのである。Lの發音の如きS、Hの發音の如き内地人の到底及ばない音を容易に出すのを見ても、語學の能力は彼等の生理的の恩恵にもよることが

分る。次に、

教授法の方面より見て、

(一) 學校生活の國語化、

(二) 直接法

(三) 表音假名遣

を挙げねばならぬ。こんな話がある。前學務局長關屋氏にある人が普通學校に於ける國語の上達を、鮮兒の能力の優秀に因すると話した時、否々教育の熱誠だときめつけたさうだ。實際、普通教育に於ける國語教授の努力はたいしたものである。一週間の時間數にしても十數時間はあるし、教授用語を全部國語としてゐる。

そして其の根本方針としては、言葉から文字へと言ふ主義で、經驗から

言語形式へと進み、やがては言葉を自由にして觀念を整理し、殆んど母國語を教へると同様の直接取扱をなしてゐる。

朝鮮でも最初は翻譯法をとつてゐたことがあるが、外國語教授としても直接法をとるが効果が多いことに目覺めて、これを施してから其の成績が向上したのであつた。

この直接法に就いて現在では何處でも行つてゐて、ルーデの各科教授法にも、

二國語を使用する學校の直觀教授と言ふ章の下に、

以前には、概して翻譯法が用ひられ、其が他の國語を學ぶに自然的な最も容易い方法であると思はれて居つた。蓋し以前には言語は之を他國語に翻譯すれば、その全意義が同時に移されて行くと思つて居つたからである。

然るにそれは間違である。成る程母國語の或語と、それと同意義を有する獨逸語との間に親密な關係を結ぶやうにすれば、一方の語が現はれて來れば、同時に他方の語が、それに附隨して來るやうになる。けれども此の場合には、縱令語が附隨して來ても、語の内容はこれと共に傳つて來ない。即ち此の場合に、内容を支へて居るのは、母國語であつて獨逸語ではない。故に二國語小學校の兒童は、翻譯法に依つて教へられて居つては、何時までたつても獨逸語を以て思考すると言ふ様にはならない。尙翻譯法によるときは獨逸語を用ひるは廻りくどく、面倒であるから、必要がなければ之を日常に用ふるのを厭ふ様になる。學校以外にて獨逸語を話さないですむ場合には兒童は之を使はうとしないから、之を速かに忘れてしまふ様になる。乃ち翻譯法にては流暢なる獨逸語の話方を馴致することが出來ない。又兒童は誤れる獨

逸語を用ふるやうにもなる。

かくして直接法が用ひられるやうになつた。此の直接法にあつては、母國語は最初僅かの間用ゐられるに過ぎない。直接法の利はコメニウス氏も既に之を認めて居つた云々。

尙ベルリッツ氏方法といふのも直接法的一種で最初教師と生徒とが外國語を話し、語の意味を直觀に依つて學習せしむるのである云々。

(ルーテ氏各科教授法上巻)

と説いてゐるが、朝鮮に於ける國語教授も之と同様の徑路を踏んで來てゐる。

殊に注意に値するは、總督府編纂の國語讀本の下學年用に表音假名遣を採用したことであつて、これは國語學校の發達上好影響を與へてゐるらしい。

この表音假名遣ひに就いては別に一小冊子を作つて説明してゐる。國語の社會化としては、地方に夜學を開催し、國語講習會等を開いてゐるが、要之生活の爲めに國語使用を強ひられ其所に常に國語の普及が見られる。

かくの如くにして、朝鮮に於ける國語教授は、成功の評をかち得てゐるのであるが、眞に國語の本質的の目的にかなつて成功してゐるだらうか。

三 國語教授の失敗の一面

ほんたうの事は、自分が持つ歴史や言葉に邪魔せられて、自分のみを後生大事と護り隔てることではない。

善を愛し、正を愛し、美を愛し、やがては自分と人をこの上なく愛さずには堪へない男や女達を世界に求めることであらねばならぬ。

二つの民族の間に、くめども盡きぬ愛の泉が見出されるならば、凡ての問題は立ちどころに解決する筈である。

何度もくりかへした如く、愛は無盡藏であり、とる程増す不可思議なもので、之ある爲めに世は光り、之ある爲めに世に潤ひがある。

そして二者の間の愛は、何と言つても尊敬と同情より始まる。

内地人が朝鮮人に、朝鮮人が内地人を愛しあひ、敬ひあふとき、期せずして、國語の本質が了解せられ、國語に或るなつかしみが生じ、朝鮮語に親しさが生れるだらう。

私達教育者は、それを長い間待ち焦れて居るではないか。

かうした所に思を及ぼす時に、現在迄の國語教授の失敗をあり／＼と見るのである。

朝鮮に於ける國語教授の失敗は種々の原因もあることであらうが、何より先に、國語教授者自身が國語に素莫な感を抱いてゐることである。殊に内地人自らが國語にひきつけられる程の愛着と趣味を持ちあはして居ないことである。

勿論、どの人でも、たゞの議論や説明では、一つはしの國語黨であるけれども、眞實自ら燃えたものが他を燃やすやうに、とりのぞくことの出來ない情味を國語にもち、それが溢れて朝鮮の子供達に迄、ある國語の境に憧憬をもたしむる事の出來るものは少ない。

たゞ物を見て用を辨じる事より、物を觀て味うてそして深く自分のものといつくしむ所まで行かねば、人を導くことが出來ない。用をなす位の國語で、ひきつけられるなど思ふ人は餘程のおめで度い人である。

極言して誤解がないならば、眞摯な言葉の教授は、其の言葉が作る最大求引力である。文藝を通してでなければ到底望まれないであらう。文にあこがれ、詩にあこがれ、やがては其の土地にあこがれ人に好感を求めものが生命ある見方ではあるまいか。

私達が朝鮮の小さき者に呈せんとした文學が既往幾何かある。

○

かく思ふ時に、私は、現行普通學校國語讀本のことを思ふ。

あの讀本位精神的貧弱なものはあるまい。

いかなる人が如何なる考で、かくも無趣味な殆んどおきまりの味の無い實用偏頗の筆を捻つたのだらう。

教科書に對する殊に國語讀本に對する考は専門的にも常識的にも、あの本から數千里の隔りを行つてゐるではないか。

偏狹な國語尊重主義者は往々にして、國語の美を知らぬものに多い。國語が當然持たねばならぬ美しい情趣や語感や、あこがれの國へ導く製作品が國語に對する無限の親和力を克ら得ると言ふことを知らないで貧弱な國語の集團を以て、これを使用しさへすれば、恰も一本の木に異なる果實を稔らしめ、紅い花を眞白い花と化せしめ得るといふ妄想の如く、其の國語を使つた歴史的 성격者と同様の人間を得ると言ふことがいかに幻覺の甚しいものであらう。

私達の國語をもつて朝鮮人に親しみ得る唯一の道は私達自身が、國語其の者の迷信的自尊心よりさきに、國語をもつて最も美しい最も愛のあつて何人にも享樂し得る藝術を提供するといふことである。

時間の経過は理窟の時代を通過してゐる。私達は國語の歴史的美を誇るよりも、現實に國語がもつ藝術美と、國語を通してが容易なる幸福と

を視せねばならない。

次に普通學校の國語讀本は、大人の頭を以て兒童を想像して書いた而も極めて幼稚な文章であることである。

兒童文學といふ立脚地から見ても到底お話にならないが又其の題材の上から見ても、變化に乏しい其の日暮しの殆ど彈力のない死文死句といつても暴評ではあるまいと思はれる。

然し乍ら作者は言ふであらう。自國語としての國語讀本でさへ文學的情趣の了解は小學兒童に困難であるのに全く他國語としての普通學校兒童にそんな六つかしい事がわかるものかと。かうした言は却つて其の人の兒童讀物に對する無見識と時代遅れとを表白するものであり又自己の兒童に對する考察の不定を暴露してゐるものである。

讀まうと欲しない兒童に強ひて讀ましめることの如何に効果なきこ

とであらう。

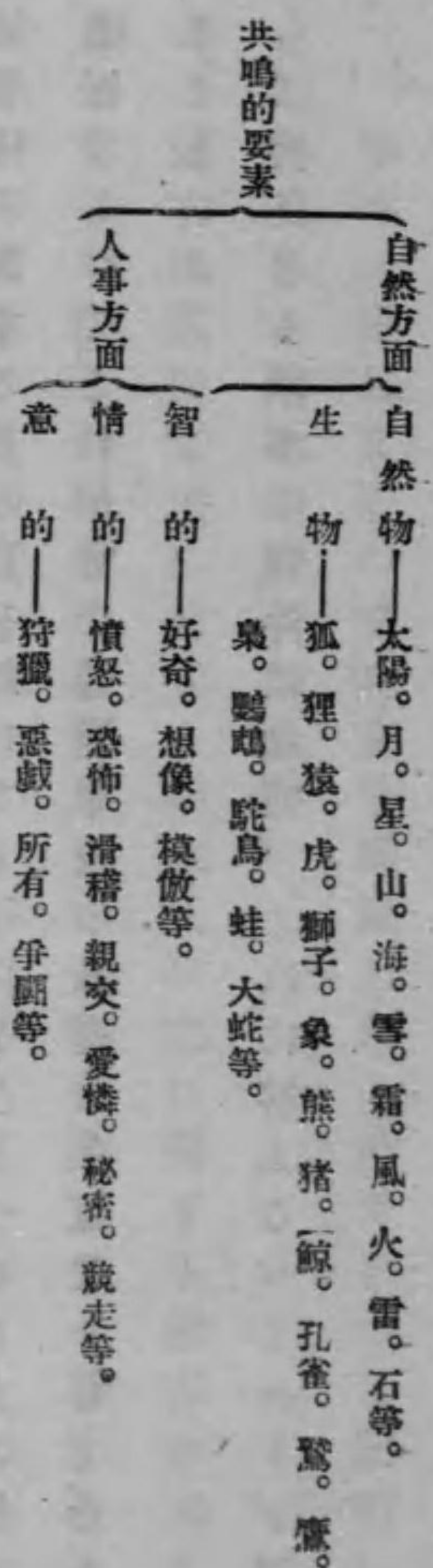
よし一時間の授業は、教師の絶えざる監視と叱責と刺戟とによつて良好に過したとしても、より以上の時間に住む兒童の耽讀の求引力なき教授や讀本の如何に無意味なものであらうぞ。

近代の兒童讀物の研究は、私達に次の様に教へてゐる。

兒童の生活が原始的、未開的、原人的、本能的、自然崇拜的と言ふ様に兒童のほんたうに要求するものは彼等の生活に近い神話、傳説、童話、歴史譚又は彼等の本能生活に關係ある經驗の材料であると。

成城小學校での實驗によると兒童の共鳴的要素は次の表のやうである。

超自然物——大人。小人。一寸法師。鬼。神様。天狗。山姥。酒頭童子。雪女郎。大法師。山男。主。天使。魔法使。龍等。



(尋常小學國語讀本の批評より)

保守的傾向の人、道學式讀本作者に如何なる抗辯があらうとも兒童に面白く讀ましめることが根本的要件であらねばならぬ。

即ちエリオット氏に言はせると、兒童の全教育は彼等の將來の知的生活を指導し、靈化して行くべきものでなければならぬ。善良なる讀書趣味を養成する教育はたとへ非系統的であり、奇矯であつても初等教育の主要目的を達したものである。讀書に依て知識を得、想像を働かさうと

する。衝動に導びかれて各個人は生涯精神的の活動を繼續するものである云々と言ひ、スタンレーホール氏によると、讀方の第一の目的は讀方の術の教育ではない、又善良なる文體の訓練でもない。或は文法的語學的訓練でもない、實に悪文學よりは善良なる文學に對する生きた鑑賞力の發達並に善良なる文學を讀む習慣の養成である。何となれば此の目的が達する時は他の目的は凡て達するからである。と言つて居る。(尋常小學國語讀本の批評より)

普通學校の讀本のどの頁を繕いても、子供をひきつける力の無いのは誠に遺憾であつて、これが實に普通學校の教授を生氣なくしてゐる缺陷ではあるまいか。

然らば善良なる讀本の條件は如何。これに答ふるべくルード説を舉げる。

- 一、讀本は國民文學の模範文を編纂したものであつて同時に少年に向くものでなければならぬ。
- 二、讀本は國民文學に對する興味及び之に對する歡喜を起すことを主なる務とし、而も巧を弄せずして教育的効果を擧ぐるものでなければならぬ。
- 讀本には教材を印象し智識を取込ませようとする任務はない。讀本は唯々兒童の見解を廣め、教授に生氣をつける助けとなるべきものである。中の讀物が話の上で價值があり、其の取扱方が正しいのであるならば、兒童の言語が自ら高尚となり、其の言語に對する理解は深められる筈である。
- 三、讀本は統合といふことにも注意を拂はなければならぬ。従つて實科の教授に聯絡せられなければならない。

(イ) 單に宗教教授に適當であるやうな教材は讀本には不向である。それは宗教科で十分に授く可きものであるけれども讀本は宗教的感情を深め、宗教的理想を表はすやうな讀物を含んでゐなければならぬ。

(ロ) 歴史科より材料を取り、歴史上の詩文を選ばなければならぬ。

(ハ) 地理學及自然生活の廣い範圍に亙つて、學者の優秀なる文章を選べ、之を讀本の中に加へなければならぬ、而も百科全書的にならないやうに注意を要する。

(ニ) 大家の手になつた經濟學及衛生學上の簡單な文章も亦含まる可きである。

(ホ) 宗教的及國民的學目に縁關する材料も含まれなければならぬ。

四、讀本は又訓育的の性質を備ふべきものであるが平凡なる道德的教訓は之を排斥すべきである。

五、讀本の材料は、能く兒童の類化することの出来るものであつて、且兒童の興味を後に至るまで興奮し、又よく之を導くものでなければならぬ。

六、讀本は強き愛國的情操の溢れ充ちて而してそれで一貫をしてゐるやうでなければならぬ。

七、讀本は詩歌殊に最近の詩歌を十分に含んでゐなければならぬ。又民俗に合ふ物語や標語等も取りこめてゐるべきである。

八、讀本の材料を其の何れを見ても成人でさへ尙喜んで之を讀む程に價值あるものでなければならぬ。

九、大家の作を改悪してはならぬ。

- 十、歴史、風俗、文明、自然、凡て郷土に對する愛を惹起することの出来るものは大に讀本中に取り入れなければならない。
- 十一、讀本は凡ての事情に注意するの必要はない。唯々特別な事情(田園的、大都市的)だけが考へられて居ればよろしい。
- 十二、甚しくむづかしい構造の文章、餘りに長き説明を要するやうな表現法は之を避けるがよろしい。言語は模範的で、國民的で、簡單で明瞭でなければならない。外國語はなるべく之を避けることが望ましい。
- 十三、讀本は現今用ゐられてゐる諸の活字で刷られなければならない。紙質は宜しく裝飾は永く持ち代價は廉でなければならない。

- 十四、讀本の分量は兒童がそれに親熟することの出来る程に限らなければならない。
- 十五、一卷に於ける材料の排列は事實の關係及順序に行はなければならない。循環的教授は兒童の精神的進歩に適合しない、下級に一度出た材料は上級に至りて再び之を繰り返へす必要はない。
- 十六、眞の學校が善良なる直觀的の方便物を存する場合には讀本の繪に然程大なる意味を與ふる必要は無い。兒童の觀念界にある事物事像は之を繪畫にして讀本に入るゝ必要はない。その讀物の了解に缺くべからざる善良な繪畫を挿む可きである。
- 十七、讀本の編纂に關しメンネル氏は次の如き注意すべき提議を出してゐる。「實際教育家は言語學者、文學者、歴史家、博物學者、經濟學者等と聯絡をとり統一した理想的讀本の構成を確實にすべき

である」と。(ルード氏各科教授法上巻より)

説は大丈夫な道を踏んでゐるから新舊を合せ集めた観もあるがホルの「讀方教材の研究は兒童に何を與ふべきかの問題より、むしろ「兒童が何を好むか」を研究するものには指針となり得る。

何といつても讀本は子供の好きなものであらねばならぬし、現實世界より想像的非現實世界のものが子供には親しみがあるし、大人でも動かれる位の文でなければ子供は動かされないことを知らねばならない。

普通學校國語讀本の大きな缺點は餘りに國家主義を押賣りしようとしたことである。日韓併合によつて内鮮一家の名は誠に遺憾なく稱せられたが、實際から觀れば内鮮同化はゾルレンであつて内鮮有差別がザインであることは近時の社會状態が雄辯に説明してゐる。

かゝるゾルレンの場合に於る讀本としては、最も考へられた立場に於

いては集中せられたる國家主義より散亂せられたる國家主義の材料こそぞましく凝つた百鍊の鐵を以て脅すより發した萬朶の櫻の美に醉させるが得策ではあるまいか。

嘗て前朝軍司令官宇都宮將軍の朝鮮に赴任せんとするや、先づ普通學校の讀本を讀んで、あれでは駄目だ。現在では今少し朝鮮人の方から教材を取らねばいけない、と道破したさうだ。一介の武弁にして猶能く之を言ふ。其の道にある人達は三省すべきであらう。

然し乍ら時の流れは總ての物を洗ふ。齋藤總督の文化政策は教育調査會となり教科書調査會となつて朝鮮教育界にもあらはれた。其の答申によれば舊套を脱しようとする氣分が仄見えぬでもない。要は其の成果にある眞に朝鮮の小さき者を思ひ帝國の前途を觀する者は大なる教育眼を有する思索家にして經世家でなければいけない。區々たる教

育學者や小官吏は時代を狭くする。恐ろしいことである。

尙普通學校の讀本に就いて一言せざるを得ないのは、其の文體である。下學年には口語體のみとしてあるはよいが上學年に強ひて内地の讀本のやうに文語體を出したのは何の意味であらう。編者は朝鮮の兒童が他日文語體の文を読み得る素養だといふに違ひないが、事實外國語としての國語教授にかゝる針の穴より蒼穹をのぞく様な考案が果して生命ある國語教授に成功するであらうか。文語體其は或意味に於て時代遅れの形式了解に費やす努力を、なほ廣く且つ多量に現在生きてゐる口語を通しての國語になれさせることの如何に有益であるかを思ふがよい。

○ 子供には、殊に、彼等の世界の狭いことは、悲しむべきことである。自由に放たれる所に子供は成長する。

私は普通學校の兒童の讀物を思ふ時に、彼等の爲めに餘りに冷淡なる社會、わけて教育者達の罪を想ふことが久しい。

普通學校兒童に對する兒童讀物提供の怠慢は、やがて普通學校の國語教授の失敗の一面の暴露ではあるまいか。

多讀の奨励すべきことは勿論、濫讀でさへ兒童の讀書趣味を養成するには悪いことではないと説かれる今日、普通學校の兒童は何を讀んだらいいのか。坊間賣り出して居る朝鮮兒童向きの讀本が幾何かある。書店の言ふ所によると、最も賣行きよきものは兒童讀物と子供雜誌である。貧弱なる「學園」と言ふ雜誌や、程度の低い而も僅かに二三冊の小兒畫篇の力は見るかげもない。

私はお伽物の流行を高調し、小説の耽讀をすゝめたい。縦令それには多少の憂ふべき點が随ふとしても、國語教育と言ふ立場より見れば九牛

の一毛である。

之を危険と言ひ早尙と言ふ論者は、先づ君達の外國語修得の過程と其の心とを反省し給へ。君達は外國物として多くの小説より詩より其の力と趣味とを得なかつたか。

教科書のみを後生大事と教へこみ、貧弱なる自分の土着言葉をふりかざして足れりとする國語教授者があつてはならない。

兒童は課外讀物を欲してゐる。欲する所に進歩がある。高等普通學校の師範科の生徒にしてお伽話の味も知らずに、やがて子供を教ふべき壇に上らうとしてゐるのを見て無量の感を禁じ得ない。

○
學藝會を見る。選拔された朝鮮兒童は教科書中のある話を見事に話す。實に巧みな教授の効果である。

皆さういふであらう。然るに皮肉にも果して彼等は了解してゐるだらうかと其の説話中の二三を質問して見るがよい。失望することが多い。

普通學校の國語の成績評價はこの極端なる暗誦偏重傾向によつて麻ち得てゐる。

即ちお經の暗誦の様なもので、了解ではないことがある。

語學には暗誦も必要ではある。而し暗誦に始まつて暗誦に終るべきものではない。

了解後の暗誦でなくては意義をなさぬ。深く刻みつけたものならば自然に、必要に應じて暗誦せられる筈である。暗誦偏重の傾向は教授の上滑りをして深味がなくなる。やがては自分のものでないものが、雜然として子供達の頭腦を組織するだらう。其の爲め國語的に木偶となり、

總てに對して味ふことを怠る。

一體書を讀ませることは考へさせることであらねばならぬ。

ある言葉の音と其の用途を教ふれば事は足るやうであるが、ほんたうの事は、其の言葉がもつ感じや其の言葉を發する體驗の深さを味はせることにあるだらう。

さうして始めて思想と言葉が密接になると思ふ。

最後に普通學校國語教授の欠陥は發音矯正偏重傾向と直觀偏重傾向とである。前者は眼前の小利に囚れて永遠の大功を逸することであり、角をためて牛を殺しつゝあるであらう。後者は徒らに物質的淺薄に流れて精神的に深味を遠ざかりつゝあるやうである。總じて直觀主義は近代の流行であるが、是は主に自然科學的分科に適用されるもので國語

教授にも必しも必要とは言はれまい。

長田新氏がホルルの説をあげて説く如く「國語教授に於ける直觀主義的態度は國語の眞生命を破壊するものである。」「國語教授を直觀主義に訴へる時には兒童精神は具象的な可視のものにのみ親んで、抽象的な不可視的な心的なものに對する精神力は發達しない即ち高等精神の萎縮を結果する。」

普通學校の教授法も教科書も殆んど直觀的の教材を集めて居る。これが遂に國語を物質的平面的のものとし何等の情味なきものとしたのではあるまいか。

然し論者は言ふであらう。思考的のものより眼前左右のものが了解し易いと。之に答へるべく近時の失語症の研究は最も早く忘れられるは最も親近な事物や動作の名稱で、感覺生活に關する語が最後まで保留

せられることを示してゐる。

通り一遍の常識的判斷は其の色を失うて學術的研究に其の座を譲らねばならぬ現今のことであれば、從來の一本道を踏みつけず別途を試みることは必要ではなからうか。

徒らに内地の因習的糟粕ばかりを嘗めないで新しくふみ出すべきであらう。

論じ去り論じ來りて私は遂に人の問題に逢着する。たゞ人にありだ。新らしき人、眞實ある、愛ある人、而して最後に我が日本に偉大なる文學の創作され、吾が朝鮮に眞純熱烈なる兒童文學者の渡來を祈る。其は果して如何なる人か。

カアライルが其に答へる。

「たゞ靜かに座して筆をとり、詩を草することをも能くするものは眞

に大詩人ではない。將となつては百萬の兵をも指揮し、朝に立つては一國の政を執るべき力もある人が其の力を傾倒して出來たのが眞の詩である。」

嗟、かうした人が書を草し、かうした人達が導いたなら如何に好い世界が出現するであらう。

(大正十年二月)

第二章 若かき教育者の手記

Sは朝鮮の地方に教へてゐたがある事情の爲め内地に歸ることゝなつた。秋近い涼味が存分に得られる黄昏に突然訪れて來た。そして近く朝鮮を去ると言つた。熱情的なそして何事でも眞面目に考へる彼には今までの自分の生活に就て語るべき事が豊かにあるらしかつた。靜かに然し力強く語つた。そして出早い月も傾く夜更獨り寂しく宿に歸つていつた。かへる時若しも讀んで頂ければといつて手記をおいていつた。色々の仕事に忙殺されてゐた爲めつい机の横の籠の中にほりこんであつたが秋風立つて之れが身にしみる頃となれば自分から去つた人達が偲ばれて來た。Sが遺した手記もかうして讀みかへして見る氣になつた。今其の二三箇所を發表する。もとよりSの本意ではなからう。

Sは今内地の靜かな村に毎日紙をとつて働いてゐる。
(Sが教壇に立つて餘程経つた頃らしいのに)

顧るに自分が教壇に立つたのは長い冬を忍んだ雜草が萌え初める頃

であつた。それから毎日同じ黒板の前に同じ様な顔つきで立つて來た。そして最早校庭の花圃に早咲きのコスモスがちらほら咲く。大體學校といふもの教員といふものがわかつて來たやうな感がする。

廣い世間を狭い教員室にきりつめて、そこで東洋や西洋の卸小賣の教育學や教授法とかを、さも勿體振つて講釋する、毎日教案を書く、自分にはどうにも出來ないと知り乍らも一時は自分の感激や衝動のために子供達の個性までも作り變へようとする、かうした、靜かに思ふと眞にはかない生活を持續して來た。それでもあの當時の自分のいらいらした神經は多くの周圍の人達をどれ程傷けたか知れない。

あの時は丁度文藝の方面にも白樺派の人道主義の作物が、恰も堤を潰した奔流の様に全國の青年の心を浪たてゝゐた。自分が或日教員室で武郎の著作集を拾ひよんでゐるのをかねて小説なんか放蕩者の讀むも

ので亡國の輩の仕事位に思つてゐた校長に見つかつて双方ともよく辨へてゐない人生のことに就いて論を戦はしたものだ。然し僅かに數箇月の今となつて最も頭の舊い頑固と評された校長が教へる爲めには先づ自分を省みなければならぬ。眞實の人間性への徹底が必要である。それには最もよく考へられた眞剣な作物に親むことが第一であるといふ様になつて來た。

それのみでなかつた。

學校の外では戦前殆ど豫期しなかつた思潮が世界の隅々迄流れて了つて、勞働問題や相互扶助論やがやかましく論せられた。それと一方に無抵抗主義と人道主義とが青年の頭を占領し始めた。近世紀の徳川文學を講ずる大學の教授達が逆立してもわからない作物がどしどし著はされた。それも皆若々しい無名の青年達であつた。働かねばならぬ。

愛せねばならぬといふことが人生途上の標語となつて來た。無意義な階級や鹿爪らしい虚勢は一たまりもなく吹き拂はれた。人其自體に價値があらねばならぬと叫ばれた。

この外部の聲が封じこめられた教員室にも窓から入口から入つて來た。これはどうすることも出来なかつた。その時自分達若かき者は一齊に歡びの聲をあげた——ひそかに。

そしてこゝから漸く眞の人間の歡びを汲み出すことが出来る氣がした。

然しほんたうに愛する事の如く難しい業は他にない。隣人を愛するやうに愛する——これさへ充分に出来れば教育の全部は盡されたのだとも思つた。其の時分倉田百三氏の「出家と其の弟子」や「歌はぬ人」を心から読みかへしたことであつた。ほんたうに愛したい。寂しさを——人

の世の寂しさを人一倍にかみしめつゝ、尙も焼き盡すやうな情で愛しい。この淺墓な今の自分で何で人を裁くことが出来よう。人と諸共に味氣ない世の様に見えるけれどもその底には普通の歡喜が何人にも拒まれずに流れてゐるのだから、そこに行きつけるまで辛棒しよう。かうした心が朝も夕も續いたことであつた。それでもどうしてこんなに獨り思案に暮れる日が多いのか。高らかにそして胸をたゞいて歌ふ日が、自分には何時めぐつて來るのやらと煩悶の裡にとちこもつて其の爲め自分の友達を困らしたことが、どんなに多かつたらう。

自分は毎朝校庭のポプラの葉蔭に一ぱいになつた愛情をつゝましくも抱いて、なづかしみよる子供達を心持ちに待つてゐたのであつた。

○ 精進の道を辿つてゐる自分ではあるけれども無用の言葉が滑り出し

て自分を困らせる。眞に心が清くなつたら言葉なんぞは末の末のことに様に思へるに違ひないだらうに、自分は絶えず言葉の爲めにひつかゝつて苦んでゐる。この頃讀んだ「幸福者」に書いてあつたことが胸に針うつ。

「心が清くなる時、心は無限に接する。その時心からあふれ出るものは無限からあふれ出る。其處に善惡を越えた美があらはれる。又自他の境をこえた愛があらはれる。」ともあつた。またこんなことも書いてあつた。

「他人の思はくや、見えをかまつて正直になれない時は、何處か心にわざとらしい處が出来る。それをさけて出来るだけ正直にすなほになるより仕方がない。自信がないとつい自分でないものに見せたがる。さういふものは心が清くならない。」

またかういふ事も書いてあつた。

「黙つてゐては用がべんじない時があるだらう。しかし黙つてゐることが出来たら黙つてゐる方がいゝ。さう云ふ時に云はれた言葉はその人のさもしさを示す許りで、生きない。權威がない。それは無限からあふれ出てゐるのではなく、あはでものゝ淺薄な根性から出てゐる。物云ふと唇さむしと云ふ感じがする。眞の言葉は無限から出て一言一句、權威をもつ。それでこそ言葉が生きるのだ。眞心にひやくのだ。」

殊に次ぎの章に來た自分の睫に涙がにじんでゐた。

「愛する兄弟よ。すべての人の心の内に入れよ。すべての人の境遇と經驗とを思ひやれ。其の時自己を見出し、兄弟よと言つて涙を目にためて抱きあひたくなる程、愛を感じるだらう。ともかくも今後生きることが随分つらく淋しい時もあらう。だが相愛して生きて、そのつらさや、淋

しさを同じく耐えなければならぬ。人を愛して、出来るだけ勇ましく生きてほしい。正しいものと善良なものゝ味方であれ。そして美しきもの、優れたものを讚美せよ。だがあらゆるものに思ひやりを忘れるな。」

自分には安價な妥協者と誠實の假面を被つてゐる偽善者とが一番恐ろしく思はれる。そんな人達が毎日あの子供達と交つてゐると思へば世の礎が破れるやうな不安を感じる。

自分さながら偏狹に生きることはまだ恕すべしだが自分でない自分を鼻の先にぶらつかせる人達ほど憐むべきものはない。廣い世の中のことでありそしてまだ完成されてゐない地上であつてみればさういふ人達の住むべき濕地が残つてゐよう。其の處に通げるがよい。學校の内——現今の社會制度では最も貧しい生活の中にも、つゝまやかに貧しき心を抱いてゆかなければならぬ殿堂——に住まふことは聖壇を穢

す異教者と同罪である。去るがいく。遁るべきである。

（窓際の楊柳が葉を振りおとした梢に寒風が咽ぶ冬の頃らしい叙景のある後に）

静かな夜だ。自分の側の火鉢の炭の上部は、さきから白い灰となつてゐる。貧しい室の隙間から風が脅かす。それでも何といふ滋味だらう。自分はもう長い間考へてゐる。自分には、孔子が言つた天命といふものが少しわかりかけたやうな氣がする。又耶穌が、マリヤがその足許に座つてナルドの油の瓶の口を破りて其の油でイエスの脚を沾し潤澤な己が髪の毛で拭つてくれたのを静かに見ながらやがて最後の聖餐を召して囚へらるべき花園へ歌ひ乍らいつた其の心持がいさゝかながら了解されて來だした。それと同時にトルストイが老齡悶々の情抑へがたく

遂に老妻と離れ家を捨て、孤獨寂寥にこの地上に最後の安息の時を見出したことも、近くは蘆花が新春で告白した春信の一節その父の死を弔はなかつた苦しみにもやるせない同情がわく。

清淨な心を持つて周圍の平和を亂すことなく、あるがまゝにてありたい。それこそ自分の願である。子供を教へる事の物質的に如何に貧しきかも知つてゐる。輕はづみではあるけれども高樓の綠酒に酔ひ乍ら天下の事を談ずるの壯も出來ないことではない。然し絢爛の花にも、ひしがれた雜草にも、同じ様に春が來る。一身をあげて民衆の爲めになげき、王道の喧傳に一生を費した孔子にも、暮春の頃紺の香のする春服をまとうて童子等と川邊の丘に低唱する憧憬はすてられなかつた。

どこまでも生きねばならぬ自分であつてみれば、この身このまゝにては、位の高下や權勢の有無では枉げることの出來ない人間性の尊嚴を擁

立せなければならぬ、自重心を捨てる譯にはいかな、生存の歡びが貧しきものゝ下からふつふつとわく。

○
ある静かな夜であつた。かねて口業を修めてゐる友が來訪した。そしてこんなことをなげいていつた。

昨日何とかいふ修養會の話しをききにいつた。まだまだ修養の足りないやうに思へる一人の男が、自己を先覺者と思ひ高ぶつて意氣揚々と氣焰をあげてゐた。上滑りな、淺墓な考が生硬な語を通してさも重々しく話されてゐた。勿論話してゐる事柄には法律に觸れるやうな過激な言もなければ人を惑はすやうな奇妙な語もなかつた。それだけ、その話には眞の生命の流は見出されず、却つて青道心の思ひあがつた、街氣な嫌味が溢れてゐた。

道ならぬことを談じ、不法なことを論ずれば一も二もなく社會の人達から押し離されるだらう。善言美辭に若き男女を魅はし、これと押へどころのない、安價な感激の涙を装ふ、惡戯な修養者位罪多き者はない。ソクラテースもキリストもこの偽善者の爲めにどれ位尊い骨打をしたことだらう。

眞純な女達から信用を得る位容易にそして考へねばならぬことはない筈だ。一途な青年を感激せしめるに用ゐる偽善位誠實に似てゐるものはない。但々この見別けは、其の人の眞實性の徹底と其の人の個性全部の發現の愛の光を見ることより外にはない。權勢高き人達の添書力を借つて、自分の貫目を増さうとしたり、名の知られることを、私に希望しないでもない若き人達の虚榮につけこんで自分のみすぎの發展の踏臺にしようとする修養喧傳者があつてはならない。

自分達は、自分の心の力で征服するより外に武器を持たないことであらば、より強く自分といふものを省みなくてはならぬ、偽善者は昔も今も、最も巧に世をわたる。なげかはしい事だ。

友は、かう語り乍らも非常な憤りの眼の裡に悲しさうな色をやどしてゐた。ほんたうに、何か下心があり乍ら、或は愛する兄弟のためではなく、己が爲めに、よい事をいふ悪い人間位卑しい者は無い。愛は押し賣りでは買はれない。愛は惑はしの種子よりは萌生へない。

○

むかし話がある。

紂が長夜の酒宴を催した。がこの宴會のため日附を忘れてはと其の左右の者に今日は何日ぢやと問ふた。左右悉く知らない。そこで人をやつて箕子に問はせた。

箕子が其の弟子どもに謂ふやうには、一體天下の主たるものが其の一國の者に日附までも忘れさせるやうになつては天下は危い。一國皆知らず。而して我獨り知つて居ては吾身が危い。こゝは考へものぢや。といつて。

「酔うてゐまして何日か存じませぬ」とことはつてやつた。世の中の大部分は罪を作つた其の人よりも作らしめた社會が責を負はねばならぬことが多いやうに思はれる。自分は過去にも澤山の不徳な男や、虚勢を張る爲め失敗ばかりしてゐる者を見た。それ等の多くは無信條と意志薄弱から來ることもあるが、その境遇がもたらす機會が彼等を陥れたことが多いやうである。現に今憂へてゐる、朝鮮教育界の無生氣といふ事も、教員其の者をば生氣なくさせる周圍にも考へ及ぼさなくてはならぬ。

朝鮮の自然が衰頹しきつてゐることが暗々裡に人間にまで及ぼすこともあらうけれども、年と共に鰻のやうに登られる制度は、生氣ある青年の氣を腐らして了ふ。光なき道は進まれない。黎明に向つてゐるといふ信念があればこそ、疲れながらも歩き續けてゐるのだ。道を開けてほしい。光を掲げてほしい。

○

(Sの手記の終りに近くなると植民地教育といつたやうなものに就いて
山本博士の植民地政策や澤柳博士の亞細亞主義や其の他の諸新聞の朝鮮觀に對して精細な論評を致へてし、白日の熱氣を吹き放つてゐる痛快文字もある。然し一般に重々しい足どりて深く思索していつた部分の告白が多い。最後に)

自分達は廣漠たる原野に毎日々々種子をおろしてゐるのだ。この事業は自分達の誰れも避けることの出来ない運命である種子の萌生へる

爲めに雜草の驅除も必要だが、自分は後をふりかへる餘裕は與へられてゐない。たいせつせと働いて播種せねばならないのだ。其は随分苦しいことだが墓場までさうせねばならない。やがて自分の記念塔はこの浩い原野の隅に築かれ自分がおろした何十萬程の數粒が芽をふいて崇い花がその塔を飾るであらう。それにつけても先頃讀んだ童話の節々が思ひ出される。

「だけど、おれはいそがしいのだ。後ろを見てはゐられない。お前さへついて来てくれればおれはお前を捨てはしない。だがかぎりのない草をむしることに大事な短かい一生をむだにするよりは一つかみでも餘計に善いたねをまく方が利口だ。そしてたとへ二本でも三本でもそれが善い實をむすんでくれればおれは王様に申し譯が立つんだ。」

「お爺さん、お前さんは幸だね。あたしはつまらない。あたしは不幸だ。」

婆さんは情ない調子で云ひました。

「辛棒しておくれよ。婆さん。お前も必要なんだ。王様はお前をかはひがつていらつしやるのだ。さあ、日が暮れない中に仕事をしてしまはう。」

そして爺さんはせつせと種子をまいていきました。婆さんはその後からいつて花をむしつて行く中に指からは血がながれ出しました。」

○ (下はこの後に左の數語を附加へてゐる)

自分は働かねばならぬ。愛せねばならぬ。産まねばならぬ。殖えねばならぬ。(大正九・九)

第三章 心のはなむけ

これは朝鮮の子供達に教へるべく地方に赴任しようとする内地から来た娘達に送つた言葉である。その娘達は私には一年間の親しい弟子である。内地の女學校を卒業して一年間教育に關することを教はつた娘達はまだ十九か二十歳かのかよはい女達である。彼女達は、すこしばかり覺えた朝鮮語をたよりに、食物から言葉から皆ちがひ、馬の背で二日もかかる寂しい田舎にまで行くのである。私達は、廟堂で唱へられる内鮮融和の裏面には、かうした女達の多大の力持ちがあることをも忘れてはならない。その女教師達は今百數十名に上つてゐる。

(一)

あなた方は春の日影を、自らの希望に燃えつゝ出る。私は又道を踏み出すための焦慮の日陰に残る。そしていよゝ別れる。

しかし、別れることを知つて、始めて別れない或る物を、ある人々に得た。道は別れる。

然し道行く人の心は別れないだらう。

(三)

食はねばならぬ身でありながら、心との燃焼のために、食ふといふことを忘却したことがあつた。その時には生れながら寂寞を打ち忘れて愛の享樂に魅せられた。それを今でも嬉しく思ふ。

善を愛することは正、眞を愛することは正、美を愛することは正。これだけが私の言はんとした全部であつた。

(三)

ロマンローランに言はせても、

この世は薔薇の花をしかれた街ではない。偉大を希ふ者の爲には常

に孤獨と寂寥に追はれる山道であると。

辛い寂しい時があるだらう。

その時だ。

自我を無くし、無邊際の法悦に入れよ。

其の鍵は人を許るし、自分を許すことだ。

(四)

音楽家でありながら、其の恵まれた耳を聳した時どんなに泣いたらうベエトウベン!

「親愛なる友よ。お前のベートベンほど不幸なものはない。私の一番尊い部分なる聴感が私を見捨てつゝある。凡ての私の愛すをもの。私の親愛なあらゆる物を捨て、まで、斯のみじめな劫愆な世の中に生き永らへなければならぬ私の一生はどれだけ悲惨だらう。」

そして又、

彼の男が有名な「月光の曲」をデリケートにした、若かきグリエッタから去られ不幸の連日にさいなまれ、悲しみ、恥辱、後悔、よくも彼の男は生きて来たものだ。

私は彼の男が可哀想でならない。

然し、戀も野心もすべてのものが去つた後には力のみが残された。力は喜びだ。

「悲しみを経るの喜び」といふ格言が聖なる悲しみの甘露を恵む。

世の中には彼の男もゐたのだ。

彼の男がゐたことが私を元氣づける。そして私は生を熱愛せずには堪へない。

オ、かくも美しい人生よ

私は千たび繰りかへして私の生を住みたく思ふ。

(五)

強い男と稱へられたニイチエも可愛想だ。

殆んど死に近い病魔に襲はれ、ワグナアとは絶交し、愛すべかりしサロメも愛し得ず、たゞ黙々として沈思し逍遙し、金風の秋海拔六千五百尺人界を遠かること遙かなシルスマリアで「永遠輪廻」の大法を覺到したが、其の結果はきくも恐ろしい。

「人間よ、お前達の一生は砂時計のやうにもどりもどつて百年千年同じ事を繰りかへすだけのことだ。お前達は釘付けされてゐる。毛一本でもお前達の自由にならない。

この宇宙の一塵よ」

然し彼も進んだ。悲壯の進軍！

オ、勇ましいい人生の戦ひ！
彼の男もよく世の中にて呉れた。
私はお前ニイチエに感謝する。
苦しむことは美しい。

(六)

やるなら、ほん氣にやれ。やらぬならきつぱりやめよ。
これだけでいいのだ。
ごまかすと妥協。「今日は明日といつて努めんとする懶惰の其の日其の日を送り、遂に人生の一大事を決行し得ないものは地下にいかにも悔いでもおつつかない。」
詩聖ブラウニングの「立像と胸像」も人事ではない。
私はずく／＼さう思ふ。

(七)

地方にいつたら寂しいだらう。
寂しい時は寂しさに住するがいい。
はじめてあつた子供が不思議に見るだらう。その時自分を不思議に見るがいい。
媚を賣る必要はない。然しつうんとして居る必要もない。自然に醜
なしともロダンがいつた。
自然がいい。

つまりぬ草木にも生命がある。

ワイルドは灰色の獄舎の窓より見ゆる一本の青い木に日光が輝いてゐるのに無限の感想を書き、ホイットマンは、ひしがれた雑草に言ひしれぬ歌情を寄せた。
深く観ると涙ぐまるる。

自分にしつくりあはぬ言葉を恐るゝがいい。

熱しすぎるとひやかされる。

常にさめてゐると、秋の水のやうに冷たい。

個性全部が動揺したら行く所までいつてみよ。

(八)

行く所に子供が待つて居る。

一ぱいの愛情をいだいて。

子供の國は未來の國。愛の國。情の國、あこがれの國である。

こんな子供があるのだもの。都會とか田舎とかが問題になるものか。

素朴な子供。外見穢い子供。やゝもすると執拗な子供。この小さき者

達が不完全であればある程あなた達が導かずに誰が導くか。

千萬の佛を刻むより一人を助けることは佛果を得るともいふ。

人生の法悦がこゝからわく。

ア、人の子を教ふことの尊嚴さ！

(九)

草原の地平線に出る朝日の光

谷あひの小さき村に入る夕日の色

素朴な人達。其のまゝの草木。

之れらは其の中にオーケストラを奏してあなた達を迎えるだらう。

(一〇)

楽しい時にこれを友とする人達は多からう。

哀しい時に之を分かち得る友を求めよ。

その時私を想ひ起してほしい。

(一一)

總じて愛だ。

物を創造する本能、相互扶助する本能。

美も義もこの原動力がなくては枯れる。

ダンテの神曲の裏にヴェトリアスがむせび、ゲーテのハウストの中にマアガレットが泣き、クリストの聖餐にマリアが泣く。

あらゆる世上の光りは愛の華であり、断つことの出来ない人生苦悶の象徴ではないか。

人と人も愛に絆ばれる。

愛の糸によらずして人間の著くる何物が縫へる

(一二)

飢と情とは二つの大きな力だ。

之を養ふ方法によつて賢愚が別れる。

つゝしんでほしい。

(一三)

人間は人間によつてのみ救はれる、

自分を了解する人があると知るだけでも生きられる。

(一四)

身體をいとはなくてはいけない。

(二五)

新しい時代はかう教へる。

物質と虚榮から逃れよ。

心の神に面接せよ。

それではなければ生きることは意味がなくて苦しい。

(二六)

其の日一日生かして貰つたことを感謝せよ。

感謝は歎びである。

(二七)

お互に會つた日を忘れぬやうに。

そして又逢ふ日には神の前に出してもほめられるものを持ちますやう

に
あなた方の賜物をおろそかにし給ふな。

……さやうなら……

人間味を
根柢としたる
國語教育
終

附録 第三章 心のはなむけ

大正十一年三月十日印刷
大正十一年三月十五日發行

著作
所有

人間を味根としたり
國語教育

發行所

東京市京橋區南傳馬町二丁目
新鴻縣長岡市表四ノ町(本店)

著者

發行者

印刷者

印刷所

定價金一圓七十錢

高田邦彦

目黒甚七

川上隆

東京市京橋區南傳馬町二丁目五番地

東京市神田區三河町一丁目十六番地

東京市神田區三河町一丁目十六番地

凹版工業株式會社

目黒書店

(東京) 電話京橋二一六三番長 電話長岡一八番
振替口座二八〇九番(岡) 振替口座三六一九番

2632
159

終

